

正誤表（『心理会計学』，中央経済社）

頁・行	誤（前）	正（後）
第1章 JDM 研究のイントロダクション		
23 頁・下 7	心理学の基礎的な仮説を発展させる	心理学の理論に基づいて仮説を展開する
25 頁・下 4	管理	統制
29 頁・上 11	「フレームワークを用いてプロジェクトを走らせる」ためには、一般的かつタスク固有の確立された知識が要求される。特に後者の知識は、タスク分析を通して得ることができる。	「フレームワークを通してプロジェクトを遂行する」ためには、一般的な、さらにタスクに特有の組織的な知識（institutional knowledge, 組織知）が要求され、このうち後者はタスク分析を通じて得られる。
29 頁・上 14	JDM 研究課題を検証するために適切な方法	JDM 研究の問いを検証するのに適した方法
31 頁・上 9	...正確性は JDM の質における唯一の次元である。	...正確性は JDM の質における次元の一つにすぎない。(元訳とは、大分意味合いが異なる。)
第3章 知識と個人的関与		
82 頁・下 6 *	すべての認知プロセスに広がる可能性がある...	すべての認知プロセスへと浸透していく可能性がある...
98 頁・上 1	少なくとも何人かの学生が適切な知識を持っているという...	適切な知識を有する学生も少なくともいくらかは存在するという...
113 頁・下 9・ 下 11	最も直接的な操作	明白な（る）操作
113 頁・下 2	外部監査人および内部監査人の、タスクへの個人的関与の影響	タスクとの外部・内部の監査人の個人的関与の影響
116 頁・上 5	最も巨大で、	最も大きく、
116 頁・上 6	したがって、より複雑な相互作用を理解するために、主要な影響だけに留まらず、さらに研究を進展させる必要がある。	より込み入った相互依存関係を理解するためには、主たる影響だけに留まらない研究群を必要とするのである。
第4章 能力、内発的動機づけ、その他の個人変数		
第4章（全体）	適切な 適切である	関連する or 関係する (本章では、「relevant」はこちらの

		ほうが文意をとりやすそう。)
124 頁・下 5	多くの専門的文献	熟練化 (を扱う) 文献の多く
127 頁・下 7	監査人の判断に同意する監査委員会のメンバーの判断の範囲に対して推論能力が影響しないことを...	監査委員会の構成員が監査人の判断に同意する程度に対し、推論能力が何ら影響を及ぼさないことを...
128 頁・上 1	PD 能力の結果としての監査人から内部監査人への信頼に違いがないことを...	PD 能力の結果として、内部監査人に対する監査人の依存に差異がないことを...
128 頁・上 3	4つの異なる監査タスクのための	4つの異なる監査タスクに対する
128 頁・上 12	数値	数
129 頁・下 12	まったく	相当に
129 頁・下 9	経験的な問題	実証的な問い
129 頁・下 8	限定的な	幅の狭い
130 頁・上 12	職業的な場面	専門的な環境
130 頁・下 11 131 頁・上 9 132 頁・上 3 以下本章全て	評価	評判
130 頁・下 8	第 1 に、会計専門家の立場を自ら選ぶ人々は、一様に刺激に対して高い欲求をもつことが妥当であるように思えるが、結果として、この種類の動機は適切ではなく、研究成果として、これらの環境によって提供される刺激は、ある人々にとっては高すぎる欲求であるかもしれないことが示されている。	第 1 に、専門家という会計のポジション (立場) を自ら選ぶ人々は刺激に対する高い欲求を一様に有し、結果的に、この種の動機は関係しないということがもっともらしいと思われるけれども、研究によると、これら環境によって供される刺激は、個人によっては過大であるかもしれないと立証される。
131 頁・上 4	業績と能力の動機	達成および力量の動機
131 頁・上 16	仕事環境	職務環境
131 頁・下 7	相反するものを含んでいる	はっきりしないものである
132 頁・下 7	より直接的な仕組みを通すこと	より直接的なメカニズムを通じて、
132 頁・下 4	努力目標 (effort direction) における増大 * 以下ある「…における増大」・「増大された…」という訳	努力の方向性 (effort direction) の強化 (or 高まり) ● 「…の増大」などとしたほうが意味が通りやすいように考える。
134 頁・上 1	多くの変数があるので、動機は成	数多くの変数が存在しており、パフ

	果にポジティブな影響を持たない (...).	オーマンスに対して動機がプラスの影響を及ぼさない原因となっている (...).
135 頁・上 16	公正と公平	正義と公平性
135 頁・下 7	範囲を示す	程度をいう
135 頁・下 1	...は、以下に含まれる。	...には、以下がある。
136 頁・下 15	異なる種類の成果は、その文脈に依存して公平であると知覚する...	文脈に依存し、様々なタイプの結果が公平であると認識する...
136 頁・下 3	会計人は顧客や当局のような異なる関係者についても自身の評価を維持することを求めるし、	会計士は、顧客や規制者のような様々な関係者の評判を維持する必要がある、
138 頁・上 4	刺激に対する、ある評価的な反応 (個人、出来事など)	刺激 (人、事象など) に対する評価的な反応
138 頁・上 10	気分は、単純な誘発体 (valanced) であると思われており...	気分とは、単に誘発的な、それらと関連する特定のターゲットをもたない強度の低い情緒であると考えられており、
139 頁・上 2	どちらの JDM の質が決定されたのかの基準	JDM の質が決定される規準
139 頁・上 14	あまり関心のない気楽な状況では	利害の小さな慣れ親しんだ状況では
139 頁・下 14	動機は感情に応じることがなく	動機は感情に優先し
139 頁・下 5	選択肢についての情報の広範囲にわたる探索をおこなうことに反するような	選択肢についての情報の広範な探索を行うのではなく、
139 頁・下 4	解答	その解答
140 頁・上 10	投資家のような人々を、やりそうにもない選択をするように向けるので	投資家のような人々に、そうでないならば行わないであろう選択をするよう導くことから
140 頁・下 5	不正確であるし	不正確であることもあり
141 頁・上 9	感情を片付ける	感情に対処する
141 頁・下 12	不確かな情報であるにもかかわらず固執してしまう、感情に影響する要因についての不適切な理論 (たとえば、「お金は幸せをもらす」) をもっている。	反証をするフィードバックがあるにもかかわらず固執する、感情に影響を及ぼす諸要因についての不適切な理論 (たとえば、「お金は幸せをもたらす」) を有する。

142 頁・上 2	財務比率情報を与えられた経営者は、その比率それ自体の実際の価値や、ある比率を去年の比率や業界の平均といかにして比較するかという標示より、それらの比率への感情的な反応を正確に呼び出すことができること	財務比率情報を提示される経営者は、比率自体の実際の数値や、ある比率が前年の比率や業界平均に対してどのように比較されるかの符号よりむしろ、それら比率に対する感情的な反応をより正確に想起できること
142 頁・上 8	その結果、数的データにもとづくどのような投資理論とも一致しない意思決定を下すことを	結果的に、数値データに基づき投資理論が予測するであろうものと首尾一貫しない決定をすることを
142 頁・上 11	資本予算の背景	資本予算の設定という文脈
142 頁・上 15	経営者たちは、それがもっている低い経済的価値にもかかわらず、圧倒的に中立的な感情の選択肢を選んでいる	経営者らは、その経済的価値は低いにもかかわらず、中立的な感情の選択肢を圧倒的に選択したのである
142 頁・下 8	なぜなら、プロスペクト理論は JDM に関する規範理論ではなく、この状況において、感情が。ネガティブなあるいはポジティブな影響をもっているのかどうかについて述べることができないからである	プロスペクト理論は JDM の規範理論ではないから、この状況においては、JDM の質に対して感情がネガティブあるいはポジティブな影響をもつかどうか言うことはできないのである
143 頁・上 6	予測された気分の影響	気分の影響の予測
143 頁・上 9	ただ、ある 1 つの研究 (Kida et al. 1998) では	1 つの研究 (Kida et al. 1998) を除くすべては、
143 頁・下 12	必要とする	伴う
143 頁・下 11	提示	示唆
143 頁・下 10	監査を実施するために	検証を導くために
143 頁・下 9	間違いである	誤解させるものである
143 頁・下 5	JDM に対する非常に重要な	JDM にとって相当の重要性のある
143 頁・下 4	ある人の...とみなされる	ある者の...をいう
143 頁・下 3	JDM 研究における関心の従属変数	JDM 研究にとって関心事となる従属変数
143 頁・下 1	この節では、前者の特徴に関係する研究については手短に触れるが、後者には最大限に関係する。	本節は前者の特徴づけに関わる研究に簡潔に触れるけれども、後者はずっとも関連性がある。

144 頁・上 4	投資家の JDM の事例報告において	投資家の JDM の逸話的な説明では
144 頁・上 12	伝統的な文献では、自信について、1 つの従属変数として考察しており、	自信に関する伝統的な文献は、独立変数として自信を調査しており、
144 頁・上 14	自信過剰は、人々が正確なものより平均して高い自信の評価をもっているときに実証される。	自信過剰は、人々が、平均して、正確なものよりも高い自信の評価づけをしているさいに立証される。
144 頁・下 4	最近の研究は、これが大きく弱点をさらしやすい仮定であることを明らかにしている。	最近の研究は、これが非常に脆弱な仮定であることを示している。
145 頁・上 6	これら違いが与えられたとき、	かような差異があるとして、
145 頁・上 8	自信過剰でない人々に対して、そのような人々については、ほとんど知られていない。	どのような人々が多かれ少なかれ自信過剰なのかについては、ほとんど知られていない。
145 頁・上 12	「男性的」になることを知覚される	「男性的」であると認識されている
145 頁・上 17	他の理論は、ある中間状態として現れる知識の自信過剰における違いを仮定する。	中間状態として生起する知識の自信過剰の差異を仮定する研究もある。
145 頁・下 3	いくつかの状況のもとでは	状況によっては
146 頁・上 1	責任帰属バイアス	自己奉仕バイアス
146 頁・上 3	知識の自信過剰におけるこれらの違いは、	知識の自信過剰のかような差異は、
146 頁・上 5	一般的には、独立変数あるいは中間状態としての自信を考察する研究は、自信過剰がより高くなるほど、正確性や規範理論の合意として典型的に定義される、より質の低い JDM に関係することを明らかにしている (Arkes 2001)。	一般的には、独立あるいは中間状態の変数として自信を調査する研究は、自信過剰の程度が高まるほど、正確性ないし規範的な理論との一致として典型的に定義される、より質の低い JDM と関係すると知見する。
146 頁・上 8	そのような自信過剰が JDM に影響すると見られることを通して示されている、いくつかのメカニズムがあるが、ほとんどの理論に共通する原理は、	それを通じて自信過剰が JDM に影響するとみられるメカニズムがいくらか提示されているものの、ほとんどの理論に共通する要素は、

146 頁・下 4	多くの研究者の関心は、実験のタスクが仮説の推定を引き起こすことであろうことよりも、自信を測定することにある。	多くの研究者は、実験のタスクに先だって自信を測定することは、仮説の推測を導くと懸念する。
147 頁・上 5	その代替的な方法としては、さまざまな自身の程度を引き出すさまざまな状況的要因によって自信を操作することが妥当である。	代替策としては、自信の程度を変動させる状況的な諸要因を変化させることにより、自信を操作するのがもっともらしく思われる。
147 頁・上 10	関連付けられる	相関する
147 頁・上 12	集合的な違い	複数の差異
147 頁・上 15	心理学研究のように、	心理学の研究と同様に、
147 頁・下 14	完全に	相当に
147 頁・下 12	意思決定支援に関する信用 意思決定支援の信用	意思決定支援への依存 意思決定支援の依存
147 頁・下 9	コンセンサス利益予測についての合意	コンセンサスの利益予測との一致
148 頁・上 9	自然実験である。	本質的には実験によるものである。
148 頁・上 10	投資家の自信に関係する要因について、従属変数として考察している。	自信を従属変数とみなし、投資家の自信と関連する諸要因を調査する。
148 頁・下 4	予約価格	留保価格
149 頁・下 19	信頼評価の方法	自らの自信の評価づけのなされ方
149 頁・下 15	そのような信頼評価の仕方は、自信過小が観察された水準の影響から引き出される。	自信の評価が引き出される方法は、観察される自信過小の水準に影響を及ぼす。
149 頁・下 6・ 下 5	付属的な知識	部下の知識
149 頁・下 2	これらの研究で、JDM の質に対する自信の影響を考察しているものはない。	これらの研究のどれもが、JDM の質に対する自信の影響については調査していない。
150 頁・上 3	母集団	普通の人々
150 頁・上 6	意思決定支援によって供給されるような他の情報に対する個人の知識への過剰な信頼の原因になっている。	意思決定支援により供されるような他の情報と比べて、自らの知識への過剰な依存によるものである。
150 頁・上 7	将来の研究に向けて最も確かな道	将来研究にとってもっとも有望な

	のりは、	道筋は、
150 頁・上 19	人々が自らの効用関数に結合させる感覚	人々が効用関数に組み込む感覚 (feelings)
150 頁・下 5	リスクに対する態度について中間状態であると見ている。	中間にある状態としてリスクに対する態度をみている。
150 頁・下 4	両方の場合において	いずれにしても
151 頁・上 7	選択肢	選択
151 頁・上 10	意見の一貫性を遂行	思考法の一貫性を論証
151 頁・上 11 158 頁・下 2	新聞は、 新聞 (が)	大衆紙 (popular press) では、 * 参考文献とされているのは、 <i>The Wall Street Journal</i> や <i>Fortune</i> 等
151 頁・上 13	多くの意思決定の理論 (最も著名なのは期待効用理論) は、	意思決定の理論の多く、特に期待効用理論は、
151 頁・上 13	リスクに対する態度において、人々の間で違いはあるが、なぜそのような違いが存在するのかは定かではないと仮定している。	人によってリスクに対する態度に差異があると仮定するが、そうした差異が存在する理由は特定していない。
151 頁・上 15	他の理論は、これらの違いを説明するために、動機と感情についての要因の組み合わせに依拠している (レビューには、...)。	これら差異を説明するために、動機づけおよび感情の要因の組み合わせを用いる研究もある (レビューについては、...)。
151 頁・下 3	直観的で	直ちに
152 頁・上 1	変数	パラメータ
152 頁・上 2	不適切な	関連のない
152 頁・上 3	混在しているが、(Larrick 1993)	はっきりしない (Larrick 1993) ものの、
152 頁・上 17	不適切なタスク形式の特徴は、... 引き出すことができる...	無関係の (レバントでない) タスクの様式という特性があると、誘発しうる...
152 頁・下 12	人々は選択肢について損得勘定によって判断する傾向にある	人々は、利得ないしは損失をもたらすものとして選択をみる傾向がある
152 頁・下 6	このようにして処理の観点から彼らの JDM の質は低くなる	したがって、プロセスの観点からは、質の低い JDM となる
152 頁・下 1	そうであれば、拡大解釈すると、もし違う形式で情報が与えられ	同じ方向でさらに進めると、このとき、異なった様式で情報を与えられ

	ば、人々が与えられた情報に普通は同じリスクに対する態度をもち同じ選択をおこなうということはないであろう。これは、少なくとも人々の JDM の質の一部は低いということである。	るならば、同様のリスク態度を通常ならば有し、かつ特定の情報のもとでは同様の選択をする人々は、一致しないということである。このことは、人々のうちで少なくとも誰かの JDM の質が低いことを意味する。
153 頁・上 7	問題描写プロセスを通して、つまり損得を含むような状況の描写を通して	問題表象プロセスを通じて、すなわちある状況を利得ないし損失を伴うものとして表象することを通して
153 頁・上 13	実験の設定の間	処理間
153 頁・下 12	確実性等価額 (certainty equivalent) を含む、	確実性等価 (certainty equivalent) のテクニックを含んだ、
154 頁・上 4	ポートフォリオの危険性とネガティブな関係がある	ポートフォリオの危険度と相反する関係がある * リスク回避性が高いと、選択するポートフォリオの危険度は低くなるという意
154 頁・上 8	十分に実務的な重要性	大きな実務上の重要性
154 頁・上 15	それらの差が生じる経緯と JDM についてそれらが及ぼす影響を伴うので、これらの非常に重要な会計環境においてさらなる注意を向ける値打ちがある。	それらが生じる経緯および JDM に及ぼす影響とともに、これら非常に重要な会計の設定においてさらなる注目に値する。
154 頁・下 10	この節では、パーソナリティと JDM の議論において繰り返し現れてきた要因との影響について考える。	本節は、パーソナリティと JDM の議論において日常的にみられる諸要因の影響を考察する。
154 頁・下 6	主義	教義 (tenets)
154 頁・下 3	「そのような認知のタスクが引き寄せられ、処理される方法についての特性」	「認知的なタスクに取り掛かり、あるいは処理する方法の...特性」
155 頁・上 1	「ある人の行動を統制する知覚された原因」	「ある者の行動に対する統制の源に関する認識」
155 頁・上 3	外的な統制の所在は、人々が、ほとんど外的な機会によって強いら	外的な統制の所在の個人は、たいていは外的な、偶然の力により結果が

	れる要因によって起こる結果であると信じるものである。	生じると信じる。
155 頁・上 8	どのような違いも	任意の違いが
155 頁・上 10	不確かな	問題のある
156 頁・上 9	研究論文は、どのような認知様式が処理を操作するのかを示さないが、その記述は問題の抽出と情報の探索に影響することを示している。	研究は、認知様式が機能するプロセスを示さないけれども、その定義は、認知様式が問題表象および情報探索に影響すると示唆する。
156 頁・上 17	どのような認知プロセスが大きな努力の受益先なのか	どのような認知プロセスが努力の増大という受取先であるのか
156 頁・下 8	一般的には、	典型的には、
156 頁・下 7	JDM の質より仕事の成果	JDM の質よりも職務のパフォーマンス
156 頁・下 5	結果として、それは、より大きい努力をして、より高い仕事の成果をもつと仮定されている	結果的に、彼ら（訳注：内的なものに動機づけられた人）は、より大きな努力を行使し、より高い職務のパフォーマンスとなると仮定される
156 頁・下 1	（冒頭ヌケ）いくつかの研究では、成果に対する統制の所在の影響を予測するための鍵は、ある個人内での所在と仕事の環境との間の組み合わせであることを示している	しかしながら、...統制の所在がパフォーマンスに及ぼす影響を予測するための鍵は、ある人の所在および職務環境の間の適合であると示している
157 頁・上 6	認知様式は人々が意思決定をおこなう際に焦点を当てる多くの代替案の範囲と情報量から構成されるという	認知様式は、意思決定をするさいに人々が焦点を当てる複数の代替案の範囲、および彼らが用いる情報の量から構成されると提案する、
157 頁・上 14	Driver (1971) の尺度形式を用いている後述する研究	Driver (1971) による様式の尺度を用いる以下のような研究
157 頁・上 15	多くの選択肢	複数の代替案
157 頁・上 17	利益を大きくし、費用を小さくする	高い利益、および低い費用をもたらす
157 頁・上 19	情報の使用と成果	情報の用法とパフォーマンス
157 頁・下 10 158 頁・上 7	特定の株や債券	特定の株式
157 頁・下 9	アナリスト (MBA 学生による代	(MBA 学生により代用された) ア

	用)	ナリスト
157 頁・下 3	カテゴリーの幅の尺度の形式	カテゴリーの幅による様式の尺度
157 頁・下 1 158 頁・上 11	重要な錯誤 (material error)	重要な誤謬 (material error)
158 頁・上 6	監査人の虚偽の判断	監査人による不正の判断
158 頁・上 9	選ばないであろうということを	選ぶ可能性が低いことを
158 頁・上 12	Bernardi (1994) は、内的な統制の所在をもつ監査人は、虚偽をより発見しやすいであろうということについて、明らかにしていないまでの予測している。	Bernardi (1994) は、内的な統制の所在の監査人は、不正を検知する可能性が高いと予測するが、それを発見はしていない。
158 頁・下 12	それらの多くが JDM の質に対して影響がないという観点から特に成功してはこなかった	JDM の質に対してそれら多くは影響がないとわかったという見地からいえば、特段の成功を収めてきてはいない
158 頁・下 8	影響を明らかにする研究は、これらのパーソナリティ要因が能力やその他の個人変数に相関しうると仮定される相関する未知の変数 (corelated omitted variables) の影響を検出しているのかもしれない (たとえば、Pincus 1990)。	影響を発見している研究は、これらのパーソナリティ要因が能力およびその他の個人 (ヒト) 変数と相関するならば、相関する欠落変数 (corelated omitted variables) の影響を検出しているのかもしれない (たとえば、Pincus 1990)。
158 頁・下 4	男性と女性、あるいは文化的な背景が異なる人々の間で、JDM の違いがあるのかどうかを考察する研究もいくつかある。	研究はしばしば、男女 (men and women) 間で、あるいは文化的背景が異なる人々の間で、JDM の違いが存在するのかどうかを調査してきた。
159 頁・上 3	会計の研究者にとって関心のあるグループの間で、ジェンダーや文化的背景が混成されていることを考えると、	会計研究者に関心のある集団内のジェンダーおよび文化的背景がさまざまであることによれば、
159 頁・上 5	経済的な成果...記述の研究が明示している	経済的帰結...予備的な証拠は示している
159 頁・上 7	心理学的で社会学的な	心理学的かつ社会学的な
159 頁・上 9 上 17	といえる について表している	をいう

159 頁・上 12	Hofstede (1980) の 5 つの諸次元 (five dimensions) のスキームや、作業環境に対して適切な文化的要因を分類することに関連する尺度を用いることである	職務環境に関わる文化的要因を分類するための Hofstede (1980) の 5 次元 (five dimensions) のスキームとその関連尺度を用いている。
159 頁・下 14	合理的	責任感がある
159 頁・下 13	個人主義対集団主義 (individualism versus collectivism) は、人々が自己利益に焦点を当てる文化に帰属するのか、それとも、より大きな集団の利益に焦点を当てる文化に帰属するのかの程度に関係する。	個人主義対集団主義 (individualism versus collectivism) とは、文化内の個々人が、自己の利益に焦点を当てるのか、より大きな集団の利益に焦点を当てるのかに関するものである。
159 頁・下 3	JDM の質に対するジェンダーや文化的背景の影響に関する研究成果について議論する代わりに、この節では、どのような研究が、認知や JDM の質に影響しうる他の要因におけるジェンダーや文化的背景に関係する違いについて、われわれに語ってくれるのかを議論する。	ジェンダーと文化的背景が JDM の質に及ぼす影響に関する知見を議論する代わりに、本節は、JDM の質に影響を及ぼしうる認知的、かつ他の諸要因におけるジェンダーと文化的背景に関する差異について研究がわれわれに教えてくれることを議論する。
159 頁・上 1	そのような違いはたくさんあるので、関心を寄せる構成概念としてジェンダーや文化的背景について考察する研究は、多様で完全に混成されている構成概念の影響を効果的に考察する危険を冒している。	そうした差異は数多く存在するため、関心のある構成概念としてジェンダーや文化的背景を調査する研究は、複数の、完全に混同された構成概念の影響を実質的に調査しているというリスクを冒している。
159 頁・上 11	このように	したがって
160 頁・上 4	断片的な	エピソード
161 頁・上 9	思考	推論
161 頁・上 10	根拠	源
161 頁・上 14	東洋文化圏から来た人々は、埋没図形テストによって求められるような背景から図形を抜き出す能力が低いことは、1 つの具体的な研	特別の知見といえば、東洋文化圏の人々は、埋没図形テストが要求するような、背景から図形を抜き出す能力が低いことである (Nisbett 2003)。

	究成果である (Nisbett 2003)。	
161 頁・上 16	しかし、文化に関係する能力の違いについての今日的な研究は、Hofstede (1980) の諸次元に関係していない。	しかしながら、文化に関わる能力の差異の今日までの研究は、それらを Hofstede (1980) の諸次元へと関連づけていない。
162 頁・上 6 上 8	文化的な集団を超えて 文化を超えた	文化的な集団にまたがる 文化間の
162 頁・上 9 162 頁・下 10	要因	不確実性回避の次元
162 頁・下 6	論理的プロセス	推論プロセス
162 頁・下 5	これらの違いのいくつかは、1 つの下位群であるらしいことを示し、一方では、その他の違いは質の低い JDM は、それと同じ下位群であるらしいことを示している。	これらの差異には、ある下位グループにとって比較的に質の高い JDM となる可能性が高いことを示すものもある一方で、同一の下位グループにとっては比較的に質の低い JDM となる可能性が高い別の差異が存在することを示している。
162 頁・下 1	構成概念それ自体としての	構成概念自体として
163 頁・上 1	代理変数となるような特定の関心の構成概念	代理するかもしれない特定の関心のある構成概念
163 頁・上 3	多様な構成概念の効果的な混成物	複数の構成概念が実質的に混じり合ったもの
163 頁・上 15	諸変数の実用的な意義の欠如	諸変数の実務上の重要性がないこと
163 頁・下 12	知識や他の重要な諸変数のような JDM の質に作用するタスクの複雑性と相互作用しうる。	知識および JDM の質に影響するタスク複雑性のような他の重要な変数と相互作用しうる。
163 頁・下 7	経験的な	実証の
163 頁・下 7	さらに、自信過剰や中間状態のような、ここで議論された諸変数の 1 つを誘発することによって機能する会計の文脈に特有の要因もあるのであろう。	さらに、自信過剰のように、ここで議論された変数の 1 つを誘発することにより、中間の状態として機能する、会計の文脈にとって特有の諸要因も存在するかもしれない。
163 頁・下 5	投資家の集団対個人の基準に関する有価証券についての考えについて考察する際に	集計・個別という基準による証券に関する投資家の思考法を調査するにあたり、

163 頁・下 2	たとえば、正確であるべきことに対する動機（たとえば、訴訟関連のもの）と求められる結論にいたる動機（たとえば、顧客への会計責任）との相互作用が監査人の JDM の質に及ぼす影響について考察することは、興味深いものになるであろう。	たとえば、正確であろうという動機、すなわち訴訟の懸念、および望ましい結論に到達しようという動機、すなわちクライアントに対する説明責任の相互作用が監査人の JDM の質に及ぼす影響について調査するのは、興味深いかもしれない。
164 頁・上 2	したがって、概していうと、上述の要因のみに焦点を当てる研究、あるいは会計の JDM に最も特有に影響する他の要因との組み合わせに焦点を当てる研究が、将来のための最大の利益となるように思われる。	全体として、このため、これら諸要因が単独で、あるいは他の要因と合わさって、会計の JDM に最も独自に影響を及ぼすような道筋に焦点を当てる研究が、将来に向けて最も関心のあるものかもしれない。
164 頁・注 1	基本的な	初歩的な
164 頁・注 2	道徳性の開発 倫理学や道徳性に依拠することを 含むような JDM の質を規定	道徳性（モラル）の発達 倫理と道徳性（モラル）への依存に 関わる JDM の質を決定する
164 頁・注 3	諸変数の JDM の質への影響	JDM の質に対するその影響
164 頁・注 4	直観的には、監査人のような専門家に大きな違いがあるということは、どのような種類の能力についてもありそうにないが、経験的な証拠からは、そうなることが示されている	監査人のような専門家は、いかなるタイプの能力についても大きな差異があるとは、直観的には思われな いものの、実証研究の証拠はそうであることを示している
164 頁・注 5	複合的で独立した 運動 博学	複数の独立の 身体・運動感覚性（身体的） 自然主義者
164 頁・注 6	ときどき このようにして、能力は実験や観察調査において測定される傾向にある。	時として したがって、能力は、実験の、あるいは質問紙の設定で測定される傾向がある。
165 頁・注 7	その影響は明らかに妥当なものである	そうした影響は明確にありそうである
165 頁・注 11	評価	評判

	から引き出されているの	に起因するもの
165 頁・注 12	引き起こす	導く
165 頁・注 13	現在の努力に対する動機の影響の説明としての自己効力感の難しさは、ある人が現在も高い水準の成果を十分に期待できるタスクを経験したことがなければ、特定のタスクのための自己効力感が高そうにないことである。 結果として、一定期間の時間をかける状況だけではなく一回試行の状況であっても、高い動機が高い自己効力感を引き起こすことはないようである。	モチベーションが現在の努力に及ぼす影響の説明としての自己効力感の困難は、高水準のパフォーマンスを現段階で予測するために十分にそのタスクをある人が経験しないと、特定のタスクに対する自己効力感が高い可能性は低いことである。 結果的に、1 回限りの試行の状況では、高いモチベーションが高い自己効力感を導く可能性は低く、むしろある期間を超えてのみなのである。
165 頁・注 14	なんらかの緩和点 動機と JDM の質との関係	どこか中間の地点 モチベーションと JDM の質の間の逆 U 字の関係
165 頁・注 15	サーベイ 会計責任 一般的な動機の他の前提に	質問紙の 説明責任 一般的な動機に先立つ要因 (antecedents)
165 頁・注 16	技術	技法
165 頁・注 17	説明したときの出来事のほうに、より高い確率を割り当てるときに起こっている	説明した場合に、ある出来事に対してより高い確率を割り当てるときに起こる
166 頁・注 18	モデル構築のような物理的なタスク これらの研究は、ここで議論されていない。	モデルを構築することのような身体を使うタスク (a physical task) こうした研究は、議論されない。
166 頁・注 19	期待される感情は期待される効用に関するものではなく、むしろ JDM に作用する 1 つの独立した要因であることに留意している	期待される感情は期待効用の一部ではなく、むしろ JDM に影響を及ぼす別個の要因であると特に言及している
166 頁・注 20	彼女の研究のなかでは操作されていないが、「報酬／もうけ」と「罰／損失」という用語でフレームさ	研究では操作されていないけれども、Luft (1994) の被験者は、報償・利得および罰則・損失に関してフレ

	れたインセンティブ契約間における選択の際、Luft (1994) の被験者は感情的な反応を予測しているように見える。	ームづけがなされたインセンティブ契約の間で選択するさい、感情的なリアクションを予測されているようである。
166 頁・注 23	これらの知見については多くの議論があるが、従属変数としての自信について考察する研究は、一般的に、自信過剰と JDM の質との間の関係はほとんどないことを明らかにしている (Plous 1993)。	自信を従属変数として調査する研究は、典型的には、自信過剰と JDM の質の間の関連がほとんどないことを知見する (Plous 1993) が、こうした知見については大論争がある (たとえば、Sporer et al. 1995)。 * 参考文献のヌケあり
166 頁・注 24	仮説の推定 (hypothesis guessing) とは、被験者が実験で検証されている仮説を理解することを意味する。危険なのは、彼らがそのときに意図的に意思に反して仮説に一致するように行動すること、あるいは仮説に一致しないように行動することである。	仮説の推測 (hypothesis guessing) とは、実験で検証中の仮説を被験者が理解することを意味する。危険なのは、被験者らがこのとき、そうでない (訳注. 検証中の仮説を理解していない) ならばしないのに、仮説と首尾一貫するように意図的に行動することや、そうでないならばしないのに、仮説と首尾一貫しないように行動することである (Cook and Campbell 1979)。* 参考文献ヌケ
166 頁・注 26	測定尺度が、サーベイや実験に起因する傾向があるのは、一般的に、アーカイバルの測定尺度は有用でないからである。これらの要因の操作は、それらを固定化されたパーソナリティ特性と考えると適切ではなくなる。	尺度は、質問紙や実験からもたらされる傾向があり、なぜならアーカイバルの尺度は、典型的には、入手可能ではないためである。これら要因の操作は、それらが固定的なパーソナリティ特性と考えると、もっともらしくはない。
166 頁・注 27	ここで、セックス (sex) とは、女性と男性との間の生物学的な違いをいい、ジェンダーの尺度として一般に用いられているものであることに留意されたい。	性別 (sex) は、ここでは女性と男性の間にある生物学的な差異をいい、ジェンダーの尺度として典型的に用いられることに留意されたい。
166 頁・注 29	この章は、これらの違いについての根拠、つまり、それらが心理学	本章は、これら差異の基盤、すなわち、それらが生理学的なもの

	上のものであるのか、社会学上のものであるかについては、議論していない。	(physiological) なのか、社会的なものなのかを議論しない。
166 頁・注 30	文化の違いに関する特定の会計研究については、その大部分が、JDM の質の問題よりもマネジメント・コントロール・システムの研究課題や変数を考察しているので、この節ではレビューしていない。さらに、この節では、会計研究は繰り返し Hofstede (1980) の研究を採用しているので、他の文化的な違いの分類学については議論していない (この研究のレビューは、Harrison and McKinnon 1999) を参照されたい)。	本節は、文化的な差異に関する特定の会計学研究をレビューせず、なぜならそれらの大多数は、JDM の質の論点よりもむしろ、マネジメント・コントロール・システム研究の間いおよび変数を調査するからである。さらに、本節は、文化的な差異のその他の分類法を議論することはなく、なぜなら会計研究では、Hofstede (1980) の研究を日常的に用いているためである (当該文献のレビューについては、Harrison and McKinnon (1990) 参照)。
第 5 章 認知プロセス		
168 頁・上 8	原因となる認知プロセスを直接的に目標に定めるならば、質の低い JDM を改善する方法は最も効果的である。	質の低い JDM を改善する手法は、原因となる認知プロセスをそれが直接に標的とするならば、最も効果的である。
169 頁・上 1	要求する。	要求するかもしれない。
171 頁・上 1	(費やした努力)	(費やされる努力)
171 頁・下 12	JDM における予測可能な誤りを生んでしまうというコストも避けられない	予測できる JDM の誤りをもたらすという点において回避できないコストがある
172 頁・上 2	認知プロセスよりはむしろ	認知プロセス以外の
172 頁・上 3	操作または測定 of どちらかを含んでおり、また後者の場合は、さらに直接的か間接的かで分類される。	操作ないし測定 of 何れかを伴うものとして分類され、後者については、直接的に、あるいは間接的になされる。
172 頁・上 7	ある特定の話題における事前の指示を報告するよう要求する	話題となる領域の事前の説明を報告するよう求める
172 頁・上 16	直接的測定法は、実験環境の中でしか有効でないというのが一般的な考え方である。	これらの方法は、典型的には、実験の設定においてのみ利用可能である。

172 頁・下 5	鍵となる批判は、言語化の要求が、	主たる批判は、言語化するように要求することは、
173 頁・上 6	典型	標準 (norm)
173 頁・上 11	1 つの方法は、特定のプロセスの説明を前提として、そのようなアプローチが作用していることを暗示するような質問をすることである。	1 つのアプローチは、特定のプロセスの説明を仮定し、そうしたプロセスが作用していることを指し示すであろう質問をすることである。
173 頁・上 12	たとえば、Hopkins (1996) は、複合金融商品の財務諸表上の分類が JDM に影響を与えるのは、それが負債か持分かについて被験者が最初におこなった分類を通じてであるという前提を置く。	たとえば、Hopkins (1996) は、複合金融商品の財務諸表上の分類は、それら金融商品の負債もしくは資本としての被験者の分類をまずは通じて影響を及ぼすと仮定する。
173 頁・上 15	実験実施後にこの説明をするために、Hopkins は、被験者に対して、実験のはじめに勘定残高のリストを用いた負債資本比率を計算させている。	この説明を実験後に調査すべく、彼は、研究において以前に見た勘定のリストを用いて負債資本比率を計算するよう被験者に依頼する。
173 頁・上 18	実験後の質問は、あらゆるプロセスに有効であるならば、優位性をもつことになる。	実験後の質問は、それらが任意のプロセスにとって有効であるという点で優位性がある。
173 頁・上 19	しかしながら、質問された点について、被験者の記憶違いがあるかもしれないで、質問は採用しづらいかもしれない	しかしながら、こうした質問は、研究内の当該時点で被験者が記憶の問題を経験するかもしれないため、利用には意外と困難がありうる
173 頁・下 10	特定の認知プロセスのみを捉え、	特定の認知プロセスのみと関係するという点で、
173 頁・下 8	知識測定に向け	知識の測定につき
173 頁・下 7	再認テストでは、どの程度まで情報が記憶され検索されうるのかを調べるため、まず既に出てきた情報をあらかじめ提示する。	再認テストは、情報が記憶され、検索されうる程度を調査するため、以前に見られた情報を人々に提示する。
173 頁・下 5	また、そのテストにおいては、不正解の選択肢 (distractors) やあらかじめ見せていない項目も用いる	それらはまた、紛らわしい選択肢 (distractors) や以前に見られなかった項目を提示するため、すべての

	ため、単にすべての項目に反応するだけでは、記憶の完全な検索には至らない。	項目に肯定的に反応するだけでは、完全な検索を人々がしているようにはみられない。
173 頁・下 2	手がかり検出理論	信号検出理論 (signal detection theory)
174 頁・上 1	特定の項目の情報	特定の話題についての情報
174 頁・上 5	手がかり	プロンプト (prompts) 【訳者注 2】
174 頁・上 6	統制手続き	統制
174 頁・上 12	心理学者は資料を作るが、	心理学者は無意味な (実験の) マテリアル (nonsense materials) を創作するが、
174 頁・上 14	検索の質が異なる結果とみなされてしまうということである	検索の質に関して異なる結果をもたらす
174 頁・上 15	すなわち、再認テストでの被験者の基礎的なタスクは、「以前見た」、「知っている」、「新しい」、および「知らない」ということを把握することである。	再認テストにおける被験者の基本的なタスクは、どの項目が「既視である」または「既知である」のか、どれが「新規である」または「未知である」のかを見つけ出すことである。
174 頁・下 10	これは、再生テストの結果や記憶を強化する方法とは不整合である。	その記憶内の力の強さや再生テストの結果とは首尾一貫しないものである。
174 頁・下 9	第 3 は、タスク情報によって形成される刺激が結果に影響を及ぼしてしまう可能性があるからである。これは特に、手がかり再生テストに関連する固有の問題であり、両テストの差異に悪影響を及ぼしうる。	第 3 に、これらの差異を悪化させうる手がかり再生に関連する特定の問題は、プロンプトは、出力干渉 (output interference) をもたらしうるタスク情報の 1 つの形態であることである。
174 頁	第 4 は、被験者は、実験時に問われた情報を思い出すことができるが、判断や意思決定をおこなう際に自身で形成した情報に着目してしまう点である。 そのことと一貫して、再生は JDM と単純には関係しない。なぜなら	第 4 に、被験者は問われると実験の情報を想起することができるかもしれないけれども、判断や意思決定を行う際に自身で創り出す情報に焦点を当てるかもしれない。 結果として、こういったことを被験者がなしていると実験者ははつき

	実験者は、被験者がすることとものを捉えることはできないからである (Moser 1992)。	りと理解できないため、再生は JDM とは何ら関係がないかもしれない (Moser 1992)。
174 頁・下 1	別々に	さまざまに
175 頁・上 1	それらの	これらの
175 頁・上 7	購入する	入手する
175 頁・上 14	興味深いことに、これまでの研究から、情報探索処理の分析においてどの方法を選ぶかが重要であることが示されている。	興味深いことに、研究は、情報探索のプロセスを研究するさい、手法の選択が重要であると示している。
175 頁・下 9	以上のように、研究者は、これら手法選択の問題、特に、関心のある独立変数と関係する情報探索行動について、用いる方法ごとに差異が生じる可能性があるということについて、少し気にかけておく必要がある。	結果的に、これらの問題、特に、関心のある独立変数と手法に関連する探索行動の差異とがどの程度まで相互作用するかにつき、認識しておく必要がある。
175 頁・下 5	問題表象を測定する際、研究者は、被験者にプロトコル法や、筆記による分析をおこなわせることができる	問題表象を測定するさい、研究者は、プロトコル法を用いたり、あるいは被験者に筆記分析 (written analyses) を供するよう依頼したりできる
175 頁・下 3	この筆記による分析は、具体的にはタスクに依存して、膨大な計算、物語的な記述、もしくは絵などのような形式をとる。	これら筆記分析は、タスクに依存して、数値計算、説話 (ナラティブ) の記述、あるいは絵といった形態をとりうる。
175 頁・下 2	たとえば、Vera-Munóz et al. (2001) は、被験者に、仮想のクライアントに対して非投資の意思決定をする助言を与えるメモを書かせている。	一例として、Vera-Munóz et al. (2001) は、架空のクライアントに対し、投資の引きあげの助言を与えるメモを書くように被験者に求める。
176 頁・上 3	この方法では、研究者は、被験者に対して、分析結果を解釈するよう要求することもできる	研究者はまた、提示された分析を解釈するよう被験者に依頼することもできる
176 頁・上 6	処理	手続
176 頁・上 6	しかしながら、日常の処理と整合	しかしながら、日々の職務と整合性

	<p>的であるがゆえに、人は自身の処理の一部分だけを記録しがちであるというデメリットもある</p>	<p>があることは、人々がその処理の部分的な記録のみを文書化することに慣れている点において、不利益を創出しうる</p>
176 頁・上 11	<p>これらの手法は、研究者が、再生や再認について以下のような特定の仮説を有している場合のみ有効に機能する。すなわち、再生や再認といった処理が、発見事実と、記憶検索の結果によってのみ予測される帰結とを区別しうるという仮説である。</p>	<p>これら手法は、研究者が、発見事実 (the findings) と記憶検索の結果のみに基づき予測されるものとを区別する、再生や再認についての特別な予測を有する限りにおいて機能する。</p>
176 頁・上 15	<p>研究者は、プロトコル法、もしくは、単純に被験者にいくつかの手がかりを与えたうえで、プロンプトがある場合もしくはない場合に、説明や予測をさせることで、仮説生成プロセスを測定することができる。</p>	<p>研究者は、プロトコル法により、あるいは、プロトコルの有無のそれぞれにつき、所与の手がかりの集合に対する 1 組の説明や予測をもたらすよう被験者に単に求めることにより、仮説生成プロセスの測定をなしうる。</p>
176 頁・下 15	<p>プロンプトとしては、仮説のサンプルを提示することや、上司など他者から別の仮説を提示されることなどが考えられる。</p>	<p>プロンプトは、サンプルの仮説、あるいは上司のような他の (情報) 源により表向きは提示される仮説ということになる。</p>
176 頁・下 13	<p>しかしながら、研究者は、プロンプトによって潜在的に生み出される可能性のある他の変数への影響がないかどうかを検討する必要がある。</p>	<p>しかしながら、研究者は、プロンプトにより潜在的に創出される出力干渉が他の諸変数と相互作用しないかどうかを考える必要がある。</p>
176 頁・下 10	<p>プロトコルの影響を超えて、</p>	<p>プロトコル法の他に、</p>
176 頁・下 2	<p>まじめに</p>	<p>真剣に</p>
176 頁・下 1	<p>ある特定の上位者によって生成された仮説の集合</p>	<p>ある特定の上位者により生成されたとされる仮説</p>
177 頁・上 2	<p>被験者は、通常とは異なる評価処理を採用してしまうかもしれない。</p>	<p>被験者は、そうした情報がないであろう場合と比べ、異なった評価プロセスに従事するかもしれない。</p>
177 頁・上 4	<p>とても信用できるものと</p>	<p>高い確率で生じるものと</p>

177 頁・上 5	ポイントとなるのは、	ここでもポイントは、
177 頁・上 9	探さなければならない	しばしば探さなければならない
177 頁・上 10	処理を決定づける要因を測定する 「間接的測定」は可能だろうか。	「間接的な測定」、あるいはプロセスを決定する諸要因の測定は、可能だろうか。
177 頁・上 13	広義に	大部分が
177 頁・上 14	知識構造や教育・経験を用いて情報探索を間接的に測定するだろうか。	知識構造により情報探索を間接的に測定するのだろうか、それとも教育・経験を用いるだろうか。
177 頁・上 15	もし仮に、知識構造を情報探索の代理変数として用いるならば、研究者は、すべての JDM の質の効果が、同じく知識構造により影響を受ける記憶検索など他の処理ではなく情報探索処理に起因することになってしまうという難しい状況に直面するだろう。	もしその代理変数として知識構造を用いるならば、記憶検索のように、知識構造によって影響を受けもする他のプロセスよりむしろ、任意の JDM の質の影響は情報探索プロセスに起因するとする困難なタスクに直面する。
177 頁・上 21	企業の人材選抜の手続き	企業の選考手続
177 頁・下 4	違う順で並べられた	違った順序で
177 頁・下 2	知識や性格により、被験者が研究者がおこなう操作を	もしその知識や他の個人特性がそうではないものを示唆するとすれば、そうした操作を被験者が
177 頁・下 1	たとえば、知識構造が優れている監査人は、実験者のインストラクションとは無関係に、自分の知識に基づいた順序に従って情報を探すだろう。	たとえば、高度に構造化された知識を有する監査人は、それ以外のことをするようにとの実験者のインストラクションとは無関係に、自己の知識構造によって示される順序で情報を探索するかもしれない。
178 頁・上 2	また他方で、認知処理の操作は、同時にほかの変数に影響されるかもしれない、そのことがその処理の効果を取り出すことを困難にするという潜在的な難しさも想定される。	またもう 1 つの困難は、認知プロセスに向けた操作は他の諸変数に同時に影響を及ぼすかもしれない、プロセスの影響を分離することを難しくすることにある。
178 頁・上 9	Sedor (2002) は、アナリストの異なる処理、特にアナリストによる	Sedor (2002) は、様々な方法で処理するよう、特に差別的に証拠を評価

	証拠評価の多様性を検証するために、実験時に提示する将来の経営計画の形式を操作した。	するようにアナリストを誘発するべく、経営者による将来計画が提示される様式を操作する。
178 頁・上 11	Sedor は、被験者に対する経営計画の検討方法に関する操作チェックの質問をいくつかすることで、提示する形式の操作が証拠評価に影響を与えるということを検証する。	彼女は、マテリアルについて考えた方法についていくつかの操作チェックのための質問をすることにより、表示様式の操作が証拠評価に及ぼす影響があることを確認する。
178 頁・上 13	また、Sedor は、質問に対する被験者の反応を分析の媒介にして予想される思考方法が、被験者の実際の判断と関連しているということを示している。	彼女はまた、これら質問に対する被験者の回答を分析において媒介変数として利用し、予測される思考法は被験者の判断と関連することを知見する。
178 頁・上 17	操作には予測効果があり、問題表象がその後の判断とも関係する	操作には予測される影響があり、問題表象とそれに続く判断を関連づけもする
178 頁・下 13	Kadous and Sedor は、再認テストを用いて問題表象を測定しているが、この方法では記憶検索を反映した測定となってしまうため、問題表象の測定としてこの方法を用いることは望ましくない。 さらに、情報探索など他の処理は一定に保たれていなければならない。	再認テストを用いて問題表象を彼らは測定するけれども、彼らの設定において、この測定は記憶検索をむしろ反映する可能性が低い。 さらに、情報探索のような他のプロセスは、一定に保たれている。
178 頁・下 10	直接的測定法、間接的測定法、処理操作のいずれもがデメリットを有しているため、研究者は、処理を研究する代替的手法を發展させている。	直接的測定、間接的測定、さらにプロセスの操作は困難でありうるため、研究者は、プロセスを研究するための代替的な手法を發展させてきた。
178 頁・下 6	1 つのアプローチは、想定される処理の困難さに対する JDM の改善方法の影響を検証することにより、JDM における処理を推論することである。	1 つのアプローチは、仮説とされる処理の困難さを対象とする改善手法の JDM に及ぼす影響を研究することにより、JDM の根底にある処理を推論することを伴うものであ

		る。
179 頁・上 3	比較的短時間で被験者実験をおこなうことができる	比較的少ない被験者の時間 (subject time) でそれを行える
179 頁・上 4	しかしながら、推論の妥当性に対する批判として、研究者が、JDM の改善方法についての観察される影響について、代替的な説明を無視してしまうという点が挙げられる。	しかしながら、推論の妥当性にとって非常に重要なのは、JDM の改善手法の観察された影響に対する代替的な説明を研究者が排除することである。
179 頁・上 7	監査計画策定時の確率判断における監査人の意思決定支援を提供している	監査計画を策定しているさいの確率判断に対する意思決定支援を監査人に提供する
179 頁・上 9	記憶検索と仮説評価の困難さから、監査人の JDM は低品質になるという仮説を立てている。	記憶検索および仮説評価の困難さゆえに、これらの判断における監査人の JDM は質が低くなると仮説付ける。
179 頁・下 12	ほかに一般的な認知プロセス研究は、被験者から得たデータを用いて定量的にモデル化する研究である。	認知プロセスを研究するためのもう一つの代替策は、被験者が提供するデータを利用し、それらを定量的にモデル化するものである。
179 頁・下 11	この研究は、… ある変数に関する仮定的な測定を与える。	このアプローチは、… 変動が許容される諸要素について「もうそうであったとしたら (as if)」という測定を与える。
179 頁・下 6	ただその代わりに、この方法は、より扱いやすいモデルを作ることを目指す。	むしろ、それらの目的は、モデル化 (modeling) をより扱いやすいものとするところにある。
179 頁・下 5	モデルを用いて処理を研究する実験研究は、分析を容易にするため、通常、評価尺度など定量的な反応を要求する。よって、プロトコルと共に生じるデータコーディングの問題は生じない傾向にある。	モデル化を伴うプロセスを調べる実験研究は、通常は、その作業を容易にするため尺度評定 (scale ratings) のような質的な回答を求める。結果として、プロトコル法で生じるデータ・コーディングの問題は、生じない傾向にある。
179 頁・下 3	加えて、これらの研究では、処理の単純化の仮定と首尾一貫するよ	加えて、こうした研究は、構造化タスクを用い、なぜならば、単純化さ

	うタスクを設計する必要があるため、体系化されたタスクを利用する。	れた処理という仮定と首尾一貫するようにタスクが設定されるからである。
179 頁・下 1	タスクを体系化することにより、	タスクの構造化により、 (タスクの構造化は、…可能とする。の形態のほうが好みですが…)
180 頁・上 3	その反面、 最も重要な欠点は、 モデルの限定的な前提	その反面、 不要？ 最も重大な欠点は、 モデルの制約的な諸仮定
180 頁・上 4	つまり、多くの要因が一定であると仮定されているため、モデルによる処理の分析は、いくぶん限定的なものになってしまう。	多くの要因は一定と仮定されることから、モデルに基づく研究は、処理に対して幾らか限定的な洞察を与えることになる。
180 頁・上 5	また処理に関する仮定も、現実の行動と一致しないところがある (Hoffman 1960)。このように、モデルベースの研究は、現実の処理の困難さに焦点を当て JDM を改善する手法を提示するには、限定された可能性しか持ち得ない。このような批判については、以下で検討することにしよう。	さらに、変化させうる処理についての仮定は、実際の行動と首尾一貫しないかもしれない (Hoffman 1960)。もしそうならば、モデルに基づく研究は、実際の処理中の苦勞を標的とする JDM の改善方法を示唆するためには、限定的な潜在能力しかもたない。こうした批判は、以下でさらに探求される。
180 頁・上 10	認知処理	認知プロセス
180 頁・上 11	回気分析のモデル群の中で、	回気分析を用いるモデル群のうち、
180 頁・上 12	レンズモデルは、意思決定者の処理に加えて、タスク環境もモデル化している点が特徴的である。	レンズモデルは、意思決定者らの処理とともにタスク環境をモデル化する点においてユニークである。
180 頁・上 17	第 1 は、手がかりとなる情報の集合 (X_1, X_2 など) であり、これは、特定の判断や意思決定に関係するものとして研究者によって設計される。	第 1 には、特定の判断や決定に関連するものとして研究者によって割り当てられる (designated) 情報の手がかりの集合 (X_1, X_2 など) である。 * 左記 (誤) は「designed」?
180 頁・上 19	互いに関係している (この関係を r_{ij} とする)	相関することもありうる (r_{ij} と表記)
180 頁・下 13	第 2 は、個人の判断または意思決定 (Y_s) である。	2 番目は、ヒトの判断や決定 (Y_s) である。

180 頁・下 12	具体例としては、監査人のゴーイング・コンサーン監査意見に関する意思決定があげられる。	たとえば、これには、ゴーイング・コンサーン（継続企業の前提）に関する監査意見を出すかどうかについての監査人の決定があるだろう。
180 頁・下 11	第 3 は、実際の結果 (Y_e)、ないし基準事象 (criterion event) であり、具体例としては、企業が倒産するかどうかということがあげられる。	3 番目は、ある会社が倒産するかなのような、実際の結果 (Y_e)、あるいは基準となる事象 (criterion event) である。

* 「誤」というよりも単なる好み。(もちろん「全て」ですが…)

Ver. 2023/07/30 (180 頁まで)

<<180 頁・下 8 行目 (原著 116 頁・本文の下 9 行目) から>>

* 以降、本節 (5-2) および次節 (5-3) は全訳 (180 頁-191 頁)

レンズモデル研究では、処理のモデルを構築するのに情報の手がかりをヒトの判断に回帰し (図 5-1 の (2) 式)、またタスクのモデルを構築するために手がかりを実際の結果に回帰する (図 5-1 の (1) 式)¹⁹。たとえ研究者が非常にたくさんの手がかりを含めたとしても、これら手がかりは、結果や JDM の変動の全てを説明するとは期待されない。すなわち、レンズモデルは、手がかり自体の誤りの可能性 (fallibility) とともに、タスクに固有の不確実性とヒトの JDM プロセスの一貫性のなさを認識する。

研究者らは、それから、他の JDM の論点だけでなくプロセスも研究するべく、幾つかの統計値を計算する。達成指数 (achievement index) (r_a)、または JDM と結果の相関は、JDM の質の指標となる。環境予測可能性 (environmental predictability) (R_e) は、実際の結果およびタスクの統計的モデルによる予測の間の相関である。これは、手がかりが結果を予測する程度を指し示すものである。次は、処理の論点を調査するさまざまな統計値である。ヒトの回帰モデルの諸係数 (b_{1s} , b_{2s} など) は、どの手がかりをヒトが JDM において用いるかを述べる (ゼロではない重み付け)。処理の 2 つ目の指標は、マッチング指数 (matching index) (G) である。これは、環境モデルの予測およびヒトのモデルの予測の間の相関である。 G は、ヒトの手がかりの重み付けが、集合的に、環境モデルのものとどのくらい適合するか、あるいは人々は、その手がかりを環境によって規定される手がかりの重み付けとどのくらい適合させるかを反映する²⁰。最後の指標は、反応の線形性 (response linearity) (R_s)

¹⁹ 回帰分析を用いるレンズモデルのようなモデル群は、処理のモデルの最も一般的なものであり、なぜなら手がかりの間の相関を変えることを可能とするからである。

²⁰ レンズモデルの優れた特徴は、特定の手がかりの重み付けに焦点を当てるよりむしろ、環境モデルの予測およびヒトのモデルの予測を互いに関連付けることである。これによ

であり、実際の JDM およびヒトのモデルによってなされる予測との間の相関である。これは、ヒトがその手がかりの重み付けにおいて首尾一貫する程度を示している²¹。ヒトの JDM の質は、環境予測可能性、首尾一貫性、および手がかりと重み付けのマッチングの乗法的関数 (multiplicative function) として表現されうる ($r_a = GR_e R_s$)。

全体として、そうすれば、レンズモデルは処理について何を教えてくれるのだろうか。それは、提示された集合から、人々がどの手がかりを用いるかを特定する。記憶想起 (memory retrieval) や情報探索についてはほとんど触れない。これら手がかりが表象に入り込み、もっともらしい説明群に影響するかもしれないという事実のほか、問題表象と仮説生成についての情報もほとんど提供しない。仮説・証拠の評価に関しては多くのことを示し、人々の手がかりの重み付けが環境モデル内のウェイトと適合する程度、および人々がそのウェイトの利用において首尾一貫的である程度を設定することになる。

幾らかの仮定が、レンズモデルが処理について何を教えうるかの基礎にはある。第 1 に、レンズモデルは、研究者が選ぶ情報の手がかりの小さな集合は、所与の判断や決定にとってすべてレバントな (relevant, 関連する) ものであり、さらに無理になされない限りはレバントでない (irrelevant, 無関係の) 手がかりを人々は用いないであろうと仮定する。第 2 に、より重要なこととして、レンズモデルは、これらの手がかりとそれらの状況特有の数値は、意思決定者全員が入手可能と仮定する。実験の設定において、これは明らかな事実である²²。しかしながら、アーカイバル・データを伴うレンズモデルを利用する研究者は、こ

り、判断と決定を行うさい、手がかりの間で人々が関連性や重複性を利用できるという考え方が可能となる。たとえば、流動比率と当座比率は、倒産を予測するのに用いられる高度に相関する 2 つの手がかりである。倒産の結果の環境モデルは、流動比率により重いウェイトを置くと仮定する。しかしながら、倒産について判断する貸し手は、当座比率により重いウェイトを置き、環境モデルと非常に似通った予測をすることもあるだろう。この場合、G は、高い質の処理であるとする一方で、個々の手がかりに焦点を当てるプロトコル法のような代替的な手法はそうではないとされるかもしれない。

²¹ 他の統計値には、生態学的妥当性 (ecological validities) として知られる手がかりと結果との間の単変量相関 (r_{1e} , r_{2e} など)、および手がかり利用係数 (cue utilization coefficients) として知られる手がかりと JDM との間の単変量相関がある。

²² 実験では、手がかりの状況特有な数値を提示することになる (たとえば、流動比率はある会社にとって 2.0 であると被験者に伝える)。場合によっては、手がかりの「数値」は、「はい」や「いいえ」、あるいは「高い」や「低い」のような言葉で提示されることもある (Cooksey 1996)。後者は、手がかりの数値が一般的に数字では述べられない状況で起こる (たとえば、内部統制が存在する、ないしは存在しない)。しかしながら、実験者が提供する記述から、手がかりの数値を最初に被験者が決定しなければならないレンズモデル研究を実施することも可能である (一例としては、Bonner [1991])。

の仮定は、さらなる仮定を含意すると認識しなければならない。追加的な仮定の一つは、情報の手がかりは、意思決定者全員に対して同時に公的に伝達されていることである。もう一つは、すべての意思決定者は、記憶想起や情報探索を通じて、適切な（すなわち、それらを測定する）状況特有の手がかりを獲得できることである。

第三に、想起と探索のプロセスを大部分は無視し、レンズモデルは、探索の順序のようなこれらプロセスの諸側面は、JDMの質とは無関係なもの、あるいはそれらは一定であると仮定する。第四に、モデルは、情報の手がかりは、他の別の関数形であるもよりむしろ、結果と人々のJDMの双方との線形の関係にあると仮定する。第五に、レンズモデルは、手がかりは結果に影響するように相互作用せず、かつ手がかり間の相互作用を人々は考慮しないと一般に仮定する。このことのさらなる含意は、レンズモデルは、重み付けられた手がかりの結合の補償的なプロセスを仮定することである。すなわち、人々は手がかりを足し合わせ、ある高い値の手がかりは、低い別の手がかりの数値を補償しうる。本質的に、レンズモデルは、人々は幾つかの情報の手がかりを選択し、その数値を入手し（通常は与えられ）、自らの認識する重要性を反映したウェイトによって手がかりの数値を掛け合わせ、もたらされた数値を足し合わせると仮定するのである²³。

レンズモデルの仮定は、したがって結果的な処理についての推論は、どの程度妥当なのだろうか。それらの多くは、実際の処理行動（およびタスク環境）を合理的に反映するとわかっている。第1に、JDMにおいて利用するのに入手可能な無限の情報が存在するようなこともあるけれども、多くのコンテキストは、他の手がかりと重複する情報の手がかりを含んでいる。たとえば、投資家はしばしば、別個の手がかりではなく会社のプレスリリースの単なる繰り返しであるようにみえかねない、会社に関する複数のメディアのレポートを見聞きする（Shiller 2001）。さらに、多くのコンテキストでは、小数の手がかりが、結果の違いの多くを説明しうる。たとえば、Altman（1968）の倒産予測モデルは、ただ5つの手がかりのみを含める。これに加え、人々は、そのJDMにおいて小数の手がかりのみを用いる傾向がある（Brehmer and Brehmer 1988）。現実ともっとも合致しないであろうここでの仮定の部分は、人々はしばしば、非診断的な手がかり（nondiagnostic cues）がJDMにとってレバントであると認識し（たとえば、Nisbett et al. 1981; Dawes et al. 1989）、よってもし研究者の手がかりの選択によって制約されないのならば、モデルに含まれない手がかりを用いることになるだろう。しかしながら、規範的にレバントでない手がかりを含めることを排除するレンズモデルの構築には何もないことに注意したい²⁴。

²³ レンズモデルなどでは、認知プロセスをこのように描写するため、研究者は、手がかりの選択、測定および重み付けを含んだより単純な処理の分類法（タクソノミ）をしばしば用いる。

²⁴ よって、レンズモデル研究に何を含めるかを決定する場合に、どの手がかりがJDMのために人々にとって利用可能かを発見するための訓戒（admonitions, 説諭）（たとえば、

2つ目の仮定は、とくにもしレンズモデルがアーカイバル・データを伴い利用されるならば、おそらく最も問題のあるものである。測定された手がかりの数値を実験が与えるというのはしばしば真実であるけれども、これは明らかに、意思決定者が直面する現実とは適合しない。手がかりの測定は、最も難しい JDM の構成要素の 1 つであると考えられ、知識が大きな役割を果たすものである (Einhorn 1972, 1974)。アーカイバルの設定では、事情はより込み入っており、なぜなら情報の手がかりは、所定の時点で意思決定者全員には入手可能でないかもしれないからである。たとえば、レギュレーション FD 以前には、財務アナリストは、投資家よりも先に会社情報にアクセスすると一般的に考えられていた (Shiller 2000)²⁵。入手可能であったとしても、データベースへのアクセスのような手がかりの数値を獲得するために必要なリソースを全ての意思決定者が有するわけでない。これらの問題を取り扱うため、研究者は、レンズモデルに依拠する実験内の手がかりを測定するために必要なものを変動することができ (Bonner 1991)、あるいは他と異なるアクセスを取り扱うように試みる追加的な分析をアーカイバル研究において実施することもできる (Bonner et al. 2003)。第3の仮定もまた問題がある。以下で議論されるように、その検索と情報探索の「質」に関して人々は違いがあり、こうした違いは JDM の質に影響を及ぼしうる。レンズモデルは、当該問題を扱うことができない。

線形の関係および相互作用に関わる 4 番目と 5 番目の仮定には、幾らかの支持がある。第1に、多くのコンテキストでは、手がかりは結果と線形の関係がある。これに加え、多くの手がかりは、結果と条件付きで単調な関係があり、このことは、ある手がかりが増大すると、他の手がかりの数値とは関係なく結果も増大することを意味する (Dawes and Corrigan 1974)。言い換えると、複数の手がかりは、これらの状況では結果に影響を及ぼすように相互作用しない。さらに、もし相互作用が存在するならば、その多くは線形のモデルにより近似されうる (Hastie and Dawes 2001)。第2に、人々は一般に、線形の関係と主たる効果に関して考えるのを選好し、結果と手がかりとの非線形の関係および手がかり間の相互作用の検知には困難がある場合もある (Brehmer and Brehmer 1988; Hammond 1996)。しかしながら、それが要求される状況においては、非線形の関係を利用し、また相互作用を考察できる場合もあり、後者は**全体処理** (*configural processing*) とよばれる (Brehmer and Brehmer 1988)。最も重要なことは、レンズモデルは、非線形の関係および相互作用を扱うために変更されうることである。

しかしながら、レンズモデルの補償的な処理の仮定には問題があり、なぜなら人々はしばしば、非補償的な JDM のプロセスを用いるためである (Einhorn 2007; Payne et al. 1993)。

Carroll and Johnson 1990) は、もっともレレバントな手がかりの決定を示唆するもの (たとえば、Cooksey 1996) よりも適切であるかもしれない。

²⁵ レギュレーション FD は、利害関係者全てに対して同時に重要情報を会社が開示することを要求する (Opdyke et al. 2000)。

これらの状況では、ある手がかりの数値の高さは、他の手がかりの数値の低さを必ずしも埋め合わせるわけではない。たとえば、**認知結果（属性）による消去（*elimination-by-aspects*）**（EBA）ルールを人々は適用することがあり、そこでは、手がかりが最低限の閾値を充足するかどうかに基づいて代替案を消去する（たとえば、大学院は、他の諸属性とは無関係に、ある特定の点数を下回る GMAT スコアの志願者を振るい落とす）²⁶。幸運にも、頻繁に用いられる 2 つの非補償的なルール（連結型（*conjunctive*）と分離型（*disjunctive*））は、レンズモデル分析に組み込み可能である（Cookey 1996）。EBA などの他の非補償的なルールを人々が用いると期待される状況においては、レンズモデルの仮定は適切ではない。

レンズモデル（と他の回帰を基盤とするモデル）は、このとき、幾らかは現実的であるように思われ、そうでない場合には、研究者らはしばしば、代替的な仮定を反映するように調整を加えることが可能である。しかしながら、情報探索のばらつきのなさ（*no variation*）のようなその仮定の幾つかは、とても重要であり、認知プロセスについて学習されうることを限られたものとする。よって、研究者は、モデル化のアプローチが意味をなすか否かを定めるため、プロセスに関する研究の目的を考えなければならない。その研究が相対的に予備的なものであるか、または JDM を改善する手法を示唆するためにプロセスを理解するように努めないのであれば、こうしたアプローチが適切であるかもしれない。さらに、研究者が仮説や証拠の評価に大部分は関心をもつのであれば、モデル化の研究は意味をなすかもしれない。

認知プロセスを研究するための数多くの代替手法が存在し、最も有望なのは、直接的な測定、モデル化、および推論「?（*backing into*）」の方法として改善手法を利用するものである。直接的な測定では、研究者は、自由な想起に対して手がかり付きの想起のような一見すると差しさわりのない方法は、その知見に有意な影響を及ぼすかもしれないことを記憶に留めておかねばならない。定量的なモデル化、とくにレンズモデルは、重大な限界を同様に有するが、研究者は、適切な環境において当該アプローチを考察すべきである。おそらくレンズモデルの最も重要な特徴は、相関する手がかりを有する環境に対して人々が適応することを可能にすることである。多くの会計の設定はそのような手がかりを含んでいるが、この問題と関連するレンズモデルの利用は、今日までには完全には真価を認められていない。「?（*backing into*）」の方法もまた、研究者が慎重な統制を行使する限りにおいて、大きな潜在能力を有している。被験者の時間が制約される場合は、とくに使いやすいものである。次節からは、さまざまな処理が JDM に及ぼす影響に関する研究を議論する。

5-3. 記憶検索が JDM の質に及ぼす影響

本節は、**記憶検索（*memory retrieval*）**、あるいは長期記憶に貯蔵された項目を想起や認識を通じて再生するプロセスを議論する。特に本節は、JDM と単純に相関するものとは異なる

²⁶ 他の非補償的な戦略は、本章の後段で議論する。

り、聞く検索が JDM に対して因果の効果をもつ程度を議論する。記憶が JDM に対して因果の影響をもつには、「オンライン (つながっている)」というよりもむしろ、過去に目にした情報の検索を判断や決定が要求しなければならない (Hastie and Park 1986)。オンラインの JDM は、情報を見たさいに人々が判断や決定を形成する場合に生起し、こうした状況では、利用される情報が JDM に影響し、さらに記憶に影響するから、あるいは JDM が記憶に影響するがゆえに、記憶と JDM は相関するかもしれない。よって、記憶検索の問題を議論するさいには、探求すべき第 1 の問いは、会計関連の JDM は、どの程度が記憶に基づくものであり、またオンラインなのかというものである²⁷。

明らかに、会計学の多くの実験研究は、記憶に基づく JDM を誘発するものである。Hastie and Park (1986) が記すように、JDM は、それが想定できない場合は、記憶を確実に要求する。事実、多くの会計学実験は、判断や決定の要求の前にある情報を見る理由を説明しない。もし被験者が求められる判断や決定を予測できないならば、記憶に依存するしかない。他方、実験者が彼らに JDM はかようなものだ と伝えるならば、あるいは文脈からそれが明らかとなるならば、被験者はオンライン・モードで作業に取り組むことができる。たとえば、継続企業の問題を指示する諸項目を読む被験者は、継続企業の判断をするように求められていると予測できるかもしれない (Choo and Trotman 1991)。

鍵となる問いは、記憶に基づく JDM とオンラインの JDM は、現実世界の会計のコンテキストではどの程度が生起するかというものである。連続するすべてのポイント (程度) の事例がありうる。クライアントの内部統制システムの質について判断するスタッフ・レベルの監査人の例を取り上げよう。そのために、監査人は、情報を集め、判断し、最も適切であると思う情報を監査調書に記載する。これは、オンラインの JDM のようである。しかしながら、作業のレビューをするさい、そのシニア・レベルの監査人は、監査調書では扱われていない数多くの質問を投げかけると仮定する。スタッフ・レベルの監査人は、クライアントからさらなる情報を集めることにより、質問に答えようとするかもしれない。しかしながら、たとえば、とくに自信があると感じている (Moeckel and Plumlee 1989; Koriat 1993) ならば、あるいは質問の項目はさほど重要ではないと感じる (Sprinkle and Tubbs 1998) ならば、記憶に依存するのかもしれない。したがって、レビュー担当者の質問を扱うさいに監査人がなす任意の判断の改訂は、少なくとも幾らかは記憶に基づくものかもしれない。以前に述べたように、処理の制約を巧みに回避するために長期記憶に依存することを選好し、高度に精通した人ほど頻繁にそうするのである (Simon 1990)。さらに、監査のような会計の設定では、効率面の懸念ゆえに以前に見たすべての情報をレビューすることは、意思決定者にとって可能ではないことが多い (Libby and Trotman 1993)。全体として、このとき、記憶

²⁷ 本節は、JDM に対する記憶の影響にその議論を限定するが、記憶に対する JDM の影響が重要ではないことを意味するものではない。ある程度までは、後者の論点は他の場所でレビューされている (たとえば、Libby and Trotman 1993)。

に基づく JDM は、会計学において重要な論点である。それが起こる程度には差異があり、さらに監査のような設定で用いられるとすれば、記憶が不正確ならば明らかに厳しい帰結がありうる。

JDM が記憶に基づく場合、JDM の質に対する記憶検索の因果のある影響とは何だろうか。この問いに答えるには、記憶検索の諸次元を詳細に描写することが必要である。すなわち、「記憶検索が多いほど (more memory retrieval)」、JDM の質が高くなると言うのは適切ではない。心理学文献で議論される記憶検索の鍵となる時限は、検索される項目の量および正確さ (accuracy) である (Koriat et al. 2000)。エピソード記憶については、正確さとは、検索された記憶が実際の経験と同じであることをいう。対して、意味記憶では、正確さは、人々が正しい (correct) 事実に基づく情報を有することを意味する。JDM の設定においては、検索の別の重要な諸次元が存在し、とくにそれらは、検索される項目とタスクとの関連性、および検索の速さであり、さらにおそらくは、項目が検索される順序であろう²⁸。

JDM が記憶に基づく場合、検索のさまざまな次元の JDM の質との関係はどのようなものであろうか。検索される項目の量の JDM との関係は、明らかではない。一方では、多くの領域において熟練者は、初心者よりも数多くの項目を検索する (Chi et al. 1988)。しかしながら、これはより多くかつより体系化された知識を反映する可能性が高い。熟練者も検索には意味のないマテリアルを与えられると、初心者と同じことをするにすぎない (Chase and Simon 1973)。さらに、検索される項目の量と質とは、必ずしも関連しない。たとえば、ある飛行機事故の直後にテレビを視聴する人々は、テレビを観ない人々に比べて、そうした事故の事例を数多く検索できるかもしれない。しかしながら、事故の事例に焦点を当てることは、安全な着陸の事例を想起できないことを意味するがゆえに、その検索の質は下がるかもしれない。もしも、検索の量が高いほど検索の質が高いといえないならば、検索の量は、JDM の質とプラスの関連はないかもしれない。事実、検索される項目の量が判断や決定をなすのに必要なものを上回っていれば、効率性はマイナスの影響を受けるかもしれない。

検索される項目の正確さを項目すべての平均と定義するならば、正確さは、JDM の有効性 (effectiveness) とプラスに関連すべきである (Hastie and Park 1986)。検索項目の関連性は、たとえば、可能なすべての関連項目の集合に対する検索項目の完全性だけでなく、タスクと関連する検索項目の割合としても定義されうる。ここでは、関連性が高まると、JDM の有効性は高まるはずである。検索項目の正確さと関連性のプラスの効果は、第 3 章で議論された知識のマイナスの影響をもたらす。たとえば、もし人々が実際に起こるものと

²⁸ これらの記憶検索の諸次元は、プロセス自体というよりむしろ検索プロセスの産物をいい、これは心理学文献と首尾一貫する (Koriat et al. 2000)。検索プロセスの影響は、第 3 章において議論されている。とくに、第 3 章は、力 (strength) のなさ、出力干渉 (output interference)、JDM にとってレレバントな項目の誤解などのような、検索プロセスの崩壊を導く多くの諸要因を議論する。

は首尾一貫しないスキーマから項目を推論するならば、検索の正確さは低下し、よって、JDMの質が下がることにもなる。また別の例としては、人々が結果の知識を検索するならば、検索される項目の関連性は低下し、なぜなら、結果は概して、JDMとは無関係であるからである。検索のスピードは、JDMの質の効率性の指標に対して明らかにプラスの影響があるが、人々が時間的制約のもとにあるならば、他の指標に対してもプラスの影響を及ぼしうる。最後に、項目が検索される順序もまた、人々が時間的制約のもとにあるならば、JDMの質に影響があるかもしれない。早い時期に最も関連性の高い項目を検索する人々は、後になって検索し、よって時間的制約下でまったくそれら（項目）を検索しないかもしれない人々よりも、質の高いJDMをする可能性が高い。

記憶検索の諸産物は、直接的に、あるいは別の認知プロセスを通じてJDMの質に影響を及ぼしうる。記憶検索とJDMとの関係は、その検索が「正しい解答」を直接に導くのであれば、媒介変数をもたないかもしれない。これは、高度な知識を有する個人の場合に起こりがちである（Simon 1990）。そうでない場合は、記憶検索は、別のプロセスを通じて作用することにより、JDMの質に影響することになる。検索される項目は、問題表象へと組み込まれ、それは仮説生成、情報探索、および仮説評価に影響を及ぼしうるとする説がある（たとえば、Pennington and Hastie 1988）。確率や頻度の判断での検索される項目の利用と関連があるとするまた別の説もある。ここでは、人々はしばしば**利用可能性ヒューリスティックス**（*availability heuristic*）を用い、それは関連する事例の思い付き易さに基づき確率や頻度を判断することを意味する（Tversky and Kahneman 1973）。このシナリオでは、検索される項目を問題表象へと組み立てるよりもむしろ、特定の仮説に好都合な検索項目の数を人々は数える（Wolfe and Pennington 2000）。利用可能性ヒューリスティックスを用いると、検索される項目の数量（quantity）がJDMの質に対してマイナスの影響を及ぼすようにさせることにもなり、なぜなら、たとえば数量は、（飛行機の例えで先に議論されたように）最近に経験したことのような要因によって影響を及ぼされ、バイアスのある、あるいは質の低い検索をもたらすからである。

どのような要因が、パフォーマンスに対する検索のさまざまな面でのプラスの影響を低めるのであろうか。すなわち、検索の諸産物が確立されたのち、何がプラスの影響を低める原因となりうるのだろうか。素早く検索される項目や早期に検索される項目は、人々が時間的な圧力のもとにない場合、JDMの有効性に対してほとんど影響がない可能性が高い。これは、試行するのに多くの時間を与えられるほど、より多くの項目を人々が検索するからである（Klatzky 1980）。検索項目の正確さと関連性というプラスの影響の調整変数（*moderators*）には、タスク複雑性、および説明責任のような要因により引き起こされる結論に関わるモチベーションがある。複雑なタスクは、より多くの数の、さらにより複雑な処理の段階を要求する（Bonner 1994）。こうした状況では、人々は、記憶から検索したものを適用できる可能性が低い（Santeau 1992b）。同様に、もしも人々が特定の結論に到達するように動機付けられているとすれば、結論を支持しない正確かつ関連する項目を無視するか、

無理にでも理屈付けするかもしれない (Kunda 1990, 1999) ²⁹。

記憶検索と JDM の質との関係を調査する会計学の研究は、その重要性についての諸評論 (essays) はあれども、相対的に数が少ない (たとえば、Birnberg and Shields 1984; Libby 1989)。その多くは、出力干渉のような検索プロセスの問題を調査し、これらの研究は第 3 章で議論されている。会計情報の作成者と利用者を調査する研究には、Luft (1994) があり、彼女は、過去のパフォーマンスに関する学生らの記憶の正確さは、その JDM の質とは関係がないことを知見する。Moser (1989) は、投資家たる被験者に対し、会社利益のある金額の増加を支持する理由、およびそれを支持しない理由を考え出し、その後、当該増加の確率 (可能性) を判断するように依頼する。相対的に多くの支持する理由を考え出す被験者ほど、より高い確率判断をし、記憶検索が利用可能性を通じて JDM に影響するのと首尾一貫するものである。Moser (1992) も同様の知見を提供する。最後に、Kida et al. (1998) は、経営者の投資決定の質は、投資代替案の数値情報よりも情動反応 (affective reactions) によって強く影響されることを知見する。情動反応は、数値情報自体より正確に思い出されるのである。不運にも、情報反応は、実験における経営者の投資代替案の見方によりバイアスがかけられる。こうしたバイアスは、JDM の質の低下を導くことになる。

以下に述べる監査研究は、検索の論点を調査する。Anderson et al. (1992) は、ある財務比率 (訳注. 棚卸資産回転率) の変動の誤謬ありの説明と誤謬なしの説明との検索の度合いが誤謬の確率 (可能性) についての判断に影響するか否かを調べ、Moser (1989) および利用可能性プロセスとは首尾一貫せずに、関係のないものである。Libby and Lipe (1992) は、金銭的インセンティブがあるならば、再生 (recall) の正確さは再認 (recognition) の正確さ以上に改善するかどうかを調べる。結果は、当該前提と首尾一貫する。彼らの前提は、再生にはより多くの努力が必要となるというものである。したがって、インセンティブに関わる努力の増大は、再生の正確さに影響を及ぼすより大きな潜在力をもつのである。結果は、こうした前提と首尾一貫する。Moeckel and Williams (1990) は、記憶に依存する場合に対し、監査調書にアクセスが可能な場合、監査人は、それら調書からの推論が優れてはいないと証明する。Johnson (1994) は、監査調書から情報を検索する監査人は、1 日後よりも 1 時間後のほうがより良い記憶を有すると知見する。

Bonner et al. (1996) は、取引サイクルをもとに構造化された条件付き確率判断に臨む場合に、場合、監査人は記憶の検索に困難を有し、なぜなら彼らの知識は監査目的をもとに構造化される傾向にあるためであると知見する。検索の支援が与えられると、監査人の困難は緩和される。さらに、検索の困難さの程度は、判断が確率理論と一致する程度と関係がある。

Rau and Moser (1999) は、一見すると無関係な監査タスクの遂行は、継続企業の判断と

²⁹ しかしながら、項目はそもそも検索されない可能性が高いようであり、なぜなら関心のある結論と首尾一貫する項目を人々は検索しがちだからである。

関連する情報についての監査人の記憶と、その判断自体に影響するのかを調査する。無関係なタスクを遂行しない被験者もいる。無関係なタスクを遂行する被験者は、会社が継続企業であり続ける能力について、プラス側（肯定的）に、あるいはマイナス側（否定的）に反映する情報を受領する。マイナス側の情報に焦点を当てるという監査人の一般的な傾向（Smith and Kida 1991）と首尾一貫し、諸条件間のそうした情報の記憶には差異がない。しかしながら、プラス側の無関係なタスクを遂行する被験者は、他と比べて有意により多くのプラス側の情報を思い出す。さらに、これら被験者は、他よりも有意により肯定的な継続企業の判断をなしており、また当該効果は、彼らの記憶のエラーによるものである。

最後に、1つの監査内の複数のタスク取り組むことの影響の Rau and Moser (1999) による調査と同じく、Lindberg and Maletta (2003) は、複数の監査クライアントの職務に従事することの記憶に対する影響を研究する。被験者は、相違する2社の在庫の監査情報を読解して、虚偽記載のある可能性について判断し、さらに再認テストを受ける。著者らは、再認テストで、あるクライアントについて以前に目にしていない報告書（言明）が別のクライアントについて与えられる情報と首尾一貫する程度を変化させる。監査人は、別のクライアントと証拠が関連する場合に、その証拠をあるクライアントのものとしてしまうとい記憶間違いを数多くする。こうした間違いは、あるクライアントの証拠が別のクライアントの状況と整合的であるほど増える。さらに、記憶は虚偽記載の判断と関連し、よって記憶間違いは、当該タスクの JDM の質に影響を及ぼすかもしれないことを示唆している。

記憶検索に関する会計学の文献は、心理学文献と概して首尾一貫する。第1に、第3章で議論されたように、会計専門家は、出力干渉のような検索プロセスの間の困難を有している。第2に、検索がどのように測定されるかにより、記憶検索結果の相違がある。第3に、たいていの会計研究は、記憶検索の正確さと関連性は JDM の質と関連するが、記憶検索の量は必ずしもそうでないと知見する。これら研究の重要性は、しかしながら、実験室の外でも、関心をもつ個々人が考慮中の JDM のタスク遂行のために記憶に依存するという共通の仮定に依存する。監査人はより重要であると思う情報に対しては記憶に依存しがちではないという Sprinkle and Tubb (1998) の知見のもとでは、当該仮定のさらなる調査は正当化されよう。より一般的には、関心のある意思決定者が職務する環境、および彼らが記憶に依存する条件を完全に理解するために徹底的なタスク分析を実施し、それからこれら諸条件もとの記憶検索の影響を調査することが、研究者にとっては重大な意味をもつ。関係のない監査タスクが記憶および継続企業の判断に及ぼす影響の Rau and Moser (1999) の調査は、これをなしている優れた研究の一例である。著者らは、継続企業の判断のタスクに関する監査基準の要求は、監査人が記憶に依存しなければならない状況を創り出していると認めている。

Ver. 2023/8/22 (原著 124 頁・下 15 行目迄)

<<以降、5-4 節 (原著 124 頁・訳書 191 頁) からは、元の形式に戻すこととする。>>

頁・行	誤（前）	正（後）
第5章 認知プロセス（「4. 情報探索がJDMの質に与える影響」～）		
191 頁・下 1	会計上の JDM タスクの多くは、長期記憶から検索された情報を基礎において単独で完結することはできず、言い換えれば、それらはいくつかの情報のオンライン処理を引き出している。	多くの会計における JDM タスクは、長期記憶から検索される情報に基づきそれのみで遂行されるものではなく、言い換えれば、いくつかの情報のオンライン処理を引き起こしている。
192 頁・上 3	多くの段階で、	多くの場合、
192 頁・上 5	探すはずである	探さなければならない
192 頁・上 5	個々の情報探索の範囲は、知識の差を含む論拠の多様性のために、違うようである（以下を参照されたい）。	個々人が情報を探索する程度は、知識の差異を含めたさまざまな理由により、異なるようである（以下を参照のこと）。
192 頁・上 9	負債契約についての深刻な違反行為の情報 … 誤った監査意見を与え、訴訟に遭うだろう。	財務制限条項の重大な侵犯についての情報 … 不適当な監査意見のもと、訴訟が提起されるかもしれない。
192 頁・上 10	諸局面を詳述する	諸次元を明確に述べる
192 頁・上 11	諸局面	諸次元
192 頁・上 12	類型	タイプ
192 頁・上 13	探索された	探索の
192 頁・上 16	人々が既存の秩序における情報を通して働くこと … そうすることを意味しない。	提示される順番に情報を処理する（work through）こと … そうしないことを意味する。
192 頁・上 18	決定行動の研究は、代替案を横断することにそぐわないような決定の選択肢における、人々の探索の範囲を検索している（Payne et al. 1993）。	決定行動の研究はまた、決定の代替案にまたがるのとは反対に、ある決定の代替案内で人々が探索する程度を調査する（Payne et al. 1993）。
192 頁・下 10	探索された情報の類型のもとでは、項目の適性を用心深く考えるようであるが、人々が考察する項目を記述することだけに関心がある研究者もいる。	探索される情報のタイプでは、項目の関連性を考慮するように慎重であるようだが、どの項目を人々が調べるかを記述することのみに関心がある研究者もいる。
192 頁・下 7	関係する	をいう

192 頁・下 6	対立する	相反する
192 頁・下 5	それより記憶に依拠する	そのかわりに記憶に依存する
192 頁・下 3	狭い範囲で探索する	より少ない情報を探索する
192 頁・下 3	加えて、… 注目すべき例外もある (Elstein et al. 1978, Phelps and Shanteau 1978)。(訳書では文末にある)	* 直後に続く一文がここである「例外」ではなく、その前で述べる知見の説明をしているため、although 以下を文頭にもっていくと意味が取りやすいと感じる。 ☞ 加えて、注目すべき例外 (Elstein et al. 1978, Phelps and Shanteau 1978) も存在するとはいえ、(文頭へ出す)
192 頁・下 1	この研究成果の説明をすると、前者は彼らの知識を最も適切な情報に対して全く使わず、さらに、彼らは自ら依拠することができる知識の蓄えを記憶のなかにすでにもっている。	当該知見を説明すると、前者(訳注. 知識のある個人)は、自らの知識を駆使して最も関連性の高い情報を用い、さらに、自らが依存可能な記憶内により多くの知識の貯えを既に有するというものである。
193 頁・上 2	ポジティブな	プラスの
193 頁・上 4	減少する	低下する
193 頁・上 5	減少した探索深度は JDM の有効性を弱めるようであるが、	探索深度の低下は有効性の低い JDM を導く可能性が高い一方で、
193 頁・上 6	一般的には深度の減少は効率性を高めるだろう。	深度の低下は概して効率性を高めることになるだろう。
193 頁・上 7 193 頁・下 8	諸局面 (以下すべて)	諸次元
193 頁・上 8	知識のある個人は連続性のない特定の情報の断片を求めるので、	知識のある個人は、順序付けて現れない特定の情報片を得ようとするため、
193 頁・上 10	また、知識のある個人は適切な情報と自適切な情報もより識別しているが (Chi et al. 1988)、これは彼らが不適切な情報を決して探索しないことを意味するのではない (Shanteau 1984)。	関連しない情報を探索することがないことを意味するものではない (Shanteau 1984) けれども、知識のある個人は、関連性のある情報と関連しない情報をより良く識別もする (Chi et al. 1988)。

193 頁・上 13	しかし、意思決定の状況において、あまり知識のない人々がどれも同じ方法で代替案を検索する傾向にある一方で、知識のある人々はときに多様な順序を探索したり、それぞれの代替案に対する多様な情報の断片を検索したりする（たとえば、Camerer and Johnson 1991）。	しかしながら、決定の状況では、知識のある人々がそれぞれの代替案に対してさまざまな順序で、またさまざまな情報片を探索することがある一方で、知識に劣る人々はそれぞれの代替案に対して同一の方法で探査する傾向がある（たとえば、Camerer and Johnson 1991）。
193 頁・上 16	これは知識のある人々の洗練された仮説評価方略の開発の試みを反映しており、それは JDM への不一致をもたすために単純な方略よりもうまく機能しないことがある。	このことは、洗練された仮説評価戦略を展開しようという前者（知識のある人々）の試みを反映し、JDM との不整合をもたすことから、単純な戦略よりも上手いかなことがある。
193 頁・下 13	人々が適応する処理制約に対する仮説評価方略の手法	人々が制約の取扱いに対して自らの仮説評価戦略を適応する方法
193 頁・下 10	しかし、この方向付けられた探索は知識の裏付けよりもタスク要求に影響されているようであろうから、それは質の高い JDM へと導かないであろう。	しかしながら、こうした方向付けられた探索は、知識により十分に情報を知らされたよりむしろ、タスクの要求によってやむなく行われたものであり、質の高い JDM を導かないかもしれない。
193 頁・下 4	好ましい	都合のよい/ 望ましい
193 頁・下 3	適応メカニズムとしての組織された知識に頼ることのある種のコストなのかもしれない	適応メカニズムとして系統立った知識に依存することのコストの 1 つであるかもしれない
193 頁・下 1	したがって、…すべての仮説生成に関連する情報よりも、…自分に好都合な仮説 …	これに伴い、生成されるすべての仮説に関連する情報よりも、…都合の良い仮説 …
194 頁・上 3	一般的には、これらの方向付けの型はともに質の高い JDM へ導かず、したがって仮説生成に先行する方向付けられた探索ができるようにはできない。	これらの方向付けられた探索の様式の双方は、典型的には、質の高い JDM を導かない一方で、仮説生成に先立つ方向付けられた探索はそれが可能である。
194 頁・上 5	そして予想されるように、方向付	さらに予測されるように、方向付

	けられた探索を使う人々や自らが探索する集合に対してより適切な項目をもつ人々が高い JDM の有効性をもつことはあまりない (Camerer and Johnson 1991)。	けられた探索を用いる人々、および探索する集合により関連性のある項目を含める人々は、比較的高い JDM の有効性であることが少ない (Camerer and Johnson 1991)。
194 頁・上 7	しかし、一般的には方向付けられた探索はより効率的なものである。	しかしながら、方向付けられた探索をする者は、典型的には、より効率性は高い。
194 頁・上 9	探索速度は、JDM の質の効率性の局面においてポジティブな影響があり、早く探索できる者は決められた時間内により多くの適切な情報の断片を得ることができるので、潜在的には時間的制約の状況下にある他の局面にも影響する。	探索のスピードは、JDM の質の効率性の次元にプラスの影響を有し、さらに時間的制約下の他の諸次元にも潜在的にプラスの影響があり、なぜなら迅速な探索者は、一定期間内により多くの関連する情報片を入手できるからである。
194 頁・上 16	探索の諸局面	探索の諸次元
194 頁・下 15	情報探索の影響でポジティブなもの の媒介は、	プラスである情報探索の影響の媒介変数 (mediators) は、
194 頁・下 14	探索と JDM との間には媒介となるものは何もない。	探索と JDM の間には媒介変数はなんら存在しない。
194 頁・下 12	適切な情報を探索し、方向付けられたやり方を行う人は、より早く問題表象を引き起こし、	関連する情報を探索し、方向付けられた方法でそれをなす人々は、より迅速に問題表象を創り出し、
194 頁・下 10	また、これらの媒介は、処理制約への適応よりも探索深度が知識を反映することを前提としている探索深度の発見を説明する。	これらの媒介変数はまた、探索深度は処理上の制約に対する適応よりむしろ知識を反映すると仮定する、探索深度の知見を説明する。
194 頁・下 8	ネガティブな探索効果の媒介	探索のマイナスの影響の媒介変数
194 頁・下 8	もし、探索の諸局面が適応性のあるメカニズムを反映するならば、他の処理の段階への不完全な投入物 (inputs) が提供されるため、それらの悪い影響が発生する。	探索の諸次元が適応的なメカニズムを反映すると、悪影響がもたらされ、なぜならそれらは他の処理の諸局面に不完全なインプットを与えるからである。
194 頁・下 3	ポジティブとネガティブともに、何が JDM の質に対する情報探索	プラス・マイナス双方の JDM の質に対する情報探索の影響を何が緩

	の影響を抑制しているのだろうか。	和するのだろうか。
194 頁・下 1	いくつかの抑制機能が記憶検索におけるものと似ている。	調整変数 (moderators) の幾つかは、記憶検索のものと同通っている。
194 頁・上 1	高いレベルのタスクの不確実性は、人々が JDM の残りの段階への探索を通して得た情報を適用することを難しくするかもしれない。	タスク複雑性の水準が高いと、探索を通して得た情報を JDM の残りの局面に対して人々が適用するのを困難にするかもしれない。
195 頁・上 3	もし人が特定の判断や意思決定に到達するための誘因に直面すれば、彼らは探索を通して得た情報のいくつかを活用することはないかもしれない (Kunda 1990)。	ある特定の判断や決定へと到達する動機に人々が直面すれば、彼らは探索を通じて得た情報の幾らかを利用しないかもしれない (Kunda 1990)。
195 頁・上 5	もしこれらの抑制機能がいくつかの探索の局面のネガティブな影響を減少させるなら、それらは JDM の質にポジティブな影響をもつであろうことに留意されたい。	これら調整変数が何らかの探索の次元のマイナスの影響を低めるのならば、JDM の質に対してプラスの影響をもつかもしいことに注意してもらいたい。
195 頁・上 8	きわめて少ない	非常に多い (quite a few)
195 頁・上 8	— (未訳)	管理会計においては、
195 頁・上 11	タスク複雑性に適応させることについて、いくつかの論拠を明らかにしている。	タスク複雑性に適応させるという何らかの証拠を見出す。
195 頁・上 13	彼らの探索する情報項目や最終判断に関しての合意がほとんどないことを報告している	探索する情報の項目に関し、さらに最終的な判断に関して、ほとんど一致しないと報告する
195 頁・下 13	アナリストが収益力に優れた企業を選択するとき	最大の収益力の会社を選択するさい、アナリストらは
195 頁・下 12	彼らの実験した特定の項目には差が見られる	彼らの調査する特定の項目には差異がある
195 頁・下 11	それらの	彼らの
195 頁・下 10	探索深度、異なる種類の情報の探索、より方向付けられた方法にお	深い探索をし、より多様な情報のタイプの探索をし、さらにより方

	ける探索があることを	向付けられた方法の探索をすると
195 頁・下 8	アナリストの代用としての会計人は学生よりも多くの情報を探索し、方向付けられた探索に従い（一方で、学生は順次探索を用いる）、探索された特定の項目に関して学生よりも差があることを示している	アナリストの代用となった会計専門家（accountants）は、学生たちよりも多くの情報を探索し、方向付けられた探索に従事し（一方、学生は逐次的な探索を用い）、探索される特定の項目に関して学生たちよりも多様であると示している
195 頁・下 4	差がない	差がある
195 頁・下 2	同様の探索の深度と速度を持っているが	同様の探索の深度・スピードであるが
196 頁・上 2	確定と未確定の両方の情報を探索するが、	確証的な情報、および反証するような情報の双方を探索する一方で、
196 頁・上 3	少ない情報でより早く検索するが、その価格予測の精度に差はない	少ない情報をより素早く検索するが、価格予測の正確さに差は全くない
196 頁・上 5	最後に、債券格付けを予測する当局のアナリストの研究において、Lewis et al. (1988) は、情報探索するアナリストは情報が与えられたアナリストよりも精度が低いことを明らかにしている。	最後に、債券格付けを予測する自治体アナリスト（municipal analysts）の研究において、Lewis et al. (1988) は、情報を探索するアナリストらは、情報を与えられたものたちよりも正確性に劣ると知見する。
196 頁・上 9	いくつかの研究は、投資家と債権者の探索プロセスに関連している。	投資家と債権者の探索プロセスに関わる研究もある。
196 頁・上 10	Lewis et al. (1988) の債券不履行の判断をするローン・オフィサーに関する研究と同様の結果を明らかにしている。	債務不履行の判断をする貸付担当者（loan officers）を用い、Lewis et al. (1988) と類似する結果を知見する。
196 頁・上 14	投資家の代用としての学生はリスクを減少させるために情報を求めるが、情報コストの増加から情報探索が減少することを明らかにしている。	投資家の代わりとなった学生らは、リスクを低めるために情報を得ようとするが、情報コストが高まると情報探索が減少すると知見する。

196 頁・下 15	多くの研究における研究テーマとなっている。	数多 <small>あまた</small> の研究の主題である。
196 頁・下 14	税務調査を行う税に関する知識がある学生は速度と深度を増すこと によって時間的制約に対する探索を 適応させるが、	税務調査のタスクをなす知識のある 税務専攻の学生は、スピードと 深度を増大することで時間的圧力 に対して探索を適応させる一方 で、
196 頁・下 9	していることの論拠	するという証拠
196 頁・下 9	税務専門家の JDM の質を適切な 項目の数から適切でない項目の数 を差し引いたものとして測定して おり（ここで適切であるとは専門 的な税務基準によって定義され る）、探索深度はこの JDM の質 とはネガティブに関係する。	ある事例を評価するために被験者 が用いる関連項目の数から関連し ない項目を差し引いたものとして 税務専門家の JDM の質を測定（こ こで関連性は、専門家の税務の基 準により定義される）する。探索 深度は、こうした JDM の質の尺度 とはマイナスに関連する。
196 頁・下 4	全般的に支持する態度	一般的に表明する立場
196 頁・下 2	法律と会計の学生はともに税務調 査において確証バイアスを示す が、法律の学生は、表向きには彼 らの訓練が原因となり、あまりそ うしない傾向がある。	法学と会計学の専攻学生ともに、 税務調査において確証バイアスを 示すものの、一見するとそのトレ ーニングゆえに、法学専攻の学生 のほうが確証バイアスを示す傾向 がより少ない。
197 頁・上 3	監査計画の環境	監査プログラムの設計の設定
197 頁・上 4	最終判断におけるものと同様に…	最終判断においてと同様に…
197 頁・上 14	より適切な手がかりを利用するで あろうことを	もっともレバントな（関連す る）手がかりを用いる可能性がよ り高いと
197 頁・上 14	探索パターンが環境の不確実性に 適応しているのである。	さらに、探索パターンは、環境の 不確実性に適応する。
197 頁・上 15	監査人の倒産予測に関して	倒産を予測する監査人を用いて
197 頁・下 15	比率変動に起因する真の誤差を決 める監査人の無能さについて、彼 らがいくつかの適切な手がかりの 探索に失敗することが原因の 1 つ であることを明らかにしている。	比率変動の原因である真の誤謬 （the true error）を監査人が決定 できない一因は、関連する手がか りのいくつかを彼らが探索し損な うがゆえである。

197 頁・下 13	彼らは企業の問題解決により近いリスク統制の評価をしていない	彼らは、企業の解決法 (solution) と類似する統制リスクの評価をしない。
197 頁・下 11	正しい仮説とみなされる証拠を受け取る監査人は、自らの探索に従う監査人よりも、最終的にそのような仮説を選ぶであろうことを明らかにしている。	正しい仮説に関わる証拠を受け取る監査人は、最終的には、自らの探索を実施する監査人よりも、当該仮説を選択する可能性がより高いことを明らかにしている。
197 頁・下 8	監査人の	監査人の中での
197 頁・下 7	ゴーイング・コンサーンの判断に適切な情報	継続企業の前提の判断に関連する情報
197 頁・下 5	Trotman and Sng (1989) は、監査人は一貫して、この環境のもとで実行可能性を示す手がかりよりも間違っただ手がかりを選ぶことを報告しているが、監査人が実行可能な仮説を起点にする場合には実行可能性に対する確証バイアスがある証拠がいくつかある。	Trotman and Sng (1989) は、当該設定において、監査人は一貫して、存続可能性 (viability) を示す手がかりよりも破綻 (failure) の手がかりを多く選択すると報告する。しかしながら、ある存続可能性の仮説から監査人がスタートする場合、存続可能性に向けられた確証バイアスの何らかの証拠が存在する。
198 頁・上 1	McMillan and White (1993) の比率変動の環境においては、エラー (エラーなし) を提示したとき、監査人は確証バイアスを示す (示さない)。	McMillan and White (1993) の比率変動の設定では、監査人は、彼らが誤謬あり (誤謬なし) と提示される場合に、確証バイアスを示している (示さない)。
198 頁・上 3	Bamber et al. (1997) は、熟練した監査人と未熟な監査人が、2つの監査タスクで確証バイアスを有することを示している。	Bamber et al. (1997) の熟練した監査人と経験の少ない監査人は、2つの監査タスクにおいて確証バイアスを示している。
198 頁・上 6	監査の証拠を解釈するなかで	監査証拠を解釈するさいに
198 頁・上 7	起こりうるエラーの仮説化の後の監査人のテスト結果選択における確証バイアスの有力な証拠を明らかにしている。	起こりうる誤謬を仮説付けたあとの監査人の検証結果の選択における確証バイアスの強力な証拠を知見する。
198 頁・上 9	彼らの研究は、監査人に中間的仮	彼らの研究は、中間段階の仮説を

	説を用意することを要求し、最初の仮説よりもむしろ直近の仮説に関連するよう情報探索を分類することを要求している点で先行研究とは異なる。	提示し、当初の仮説よりも直近の仮説と関連付けて情報探索を分類するように監査人に要求する点において先行研究と異なる。
198 頁・上 11	また、彼らは確証方略が JDM の効率性に有益であることを明らかにしている。	彼らはまた、確証的な戦略 (the confirmatory strategy) は JDM の効率性にとって有益であると知見する。

<<198 頁・上 13 行目 (原著 129 頁・上 9 行目) から>>

* 以降、本節 (5-4) の最終段落は全訳

全体として、JDM の質と情報探索との関係にかかわる会計学の知見は、心理学におけるものと相当に似通っている。知識構造の相違と処理上の制約への適応の双方を反映するということと首尾一貫し、探索の深さは JDM の質とさまざまに関係する。方向付けられた探索を用いる会計人は、そうでないものよりも質の高い JDM をする。さらに、人々がアクセスする項目には大きな違いがある³¹。会計人は、管理・財務会計の設定において確証バイアスを示すが、監査の設定においてはそうする可能性は低いようであり、監査人が職業的専門家の懐疑主義 (skepticism) を要求されるのと合致する。しかしながら、監査人による中間段階の仮説を引き出す将来研究が、以前の知見はここでの方法論的な問題によるものであるかどうかを決定付けるには必要とされよう。これに加え、どのような条件下では、探索における確証バイアスが JDM の質に対してマイナスの影響を及ぼすのかを決める研究が求められる。多くの場合、それは上手く機能する適応メカニズムであるかもしれない。最後に、情報探索の研究は、会計に固有の諸論点に対してより一層焦点を当てるべきである。たとえば、監査人は、専門家の基準に準拠するために「十分な適格性のある証拠 (competent evidence)」を探索しなければならない。このことは、深い探索を監査人が実行することを意味する。とはいえ、彼らは、時間的圧力のように探索の減少を導く諸条件もまた経験する。研究では、監査人の探索はこれら相殺し合う諸力 (countervailing forces) をどのように反映するのかを調べうるだろう。

頁・行	誤 (前)	正 (後)
第 5 章 認知プロセス (「5. 問題表象が JDM の質に与える影響」～) ***		

³¹ JDM の質と関連する特定の項目を識別する学生もいる。アナリストらの特定の項目の利用の情報については、たとえば、McEwen and Hunton (1999) を参照。

** 本節では、相当数の意識がなされているものの、非常に巧みな訳出となっているため、修正すべき点は少ない。しかしながら、直訳を意図した他の一とくに、上枝担当の一箇所

199 頁・下 5 201 頁・下 14 201 頁・下 13 205 頁・下 7 208 頁・下 11 208 頁・下 10	ポジティブ	プラス
201 頁・上 13	適応する可能性はあるが	適応的 (adaptive) である可能性はあるけれども
202 頁・下 6	問題表象を有する。	問題表象を有すると報告する。
205 頁・上 5	保持すべき	有すべき
205 頁以降 数多くある	セット	集合 * 意味は伝わるが、「集合」と訳出しても良いかもしれない。
206 頁・下 15	これは、利用可能性ヒューリスティックス...	これは、 <u>確率を判断するために、</u> 利用可能性ヒューリスティックス... (翻訳スケ)
206 頁・下 8	正しい感覚	正確な認識 (accurate ... perceptions)
207 頁・上 14	さまざまな職業 (たとえば、会計士) に対するイメージと	さまざまな職業 (たとえば、会計士) のステレオタイプと
207 頁・下 8	パターン認知	パターン認識
208 頁・上 5	固定観念	ステレオタイプ
208 頁・下 16	単一の広範囲な仮説は、その広範囲な仮説と手がかりの両方に...	単一の広範囲なモデルは、手がかりとモデル双方に
209 頁・上 8 209 頁・上 9 211 頁・下 13 211 頁・下 9	感じた 感じる	認識した 認識する
209 頁・上 14	刺激	刺激 (prompt)
209 頁・下 7 210 頁・上 10 210 頁・下 11	正しい仮説を生成する 正しい仮説を生成した	正しい仮説 (結果) をもたらす 正しい仮説をもたらした
211 頁・上 1	その他の研究では、違ったタイプのタスクが用いられている。	残りの研究では、別のタイプのタスクを用いている。

からすると整合性は低いかもしれない。

参考文献		
368 頁・上 7	<u>Expen</u> ences	<u>Experi</u> ences

<<212 頁・上 8 行目（原著 138 頁・上 26 行目）から>>

* 以降、本節（5－7）は全訳

5－7 仮説・証拠評価が JDM に及ぼす影響

関心のある最後の認知プロセスは、仮説評価（hypothesis evaluation）である。当該局面では、人々は典型的に、当初に生成される仮説を支持する、あるいは仮説を反駁するような証拠となる追加の情報を収集する。こうした証拠をもとにして、彼らは、自らの最終的判断として役立つ 1 つないし複数の仮説を選択する。仮説評価プロセスは、監査の比率分析のように、早期の仮説評価を要求するタスクにおいて明らかに重要である。しかしながら、明示的な仮説生成を要しない多くの会計のタスクは、仮説評価と同種のプロセスを求める。たとえば、統制リスクを評価している監査人は、証拠を集める前にはリスク水準についての仮説を生成しないかもしれない。それにもかかわらず、彼らの証拠評価は、明確な仮説を評価するプロセスと類似する。さらに、「低い」、「中程度」、「高い」などの統制リスクの評価に利用可能な選択は、暗黙裡の仮説が考慮されるかもしれない。もっとも重要なのは、人々は、仮説評価と証拠評価の間に数多くのエラーをし、それらは質の低い JDM および深刻な帰結を導きうることである。たとえば、投資信託会社は、人々の仮説評価のバイアスが市場価格に影響を及ぼし、よって、異常リターンを機会をもたらすという仮定に基づき、人々の仮説評価バイアスに対して逆張りする戦略を用いてきた（Sorenson 1988; Wysocki 1996）。さらに、人々が仮説評価と証拠評価において間違い（エラー）を犯す程度は、個人・状況間でさまざまである。本節は、仮説・証拠評価についてわれわれが知ること、とくに JDM の質に影響を及ぼすプロセスにおける規則性について議論する⁴⁴。

他のプロセスと同様に、仮説・証拠評価は複数の段階を伴い、よってそれぞれの段階で何が起こるかによって JDM の質は影響される。第 1 に、人々は証拠を集めるためテストを設計する必要があり、テスト設計の質は JDM の質と関係する。第 2 に、人々は典型的に、追加的な情報探索を実施し、恐らくは、これらカスタマイズされたテストや標準化されたチェックリストなどの他の方法を用いて追加的な情報の測定も実施する。結果的に、仮説評価の間の探索・測定の質は、JDM の質と関係する。第 3 に、人々は、明示的な仮説や黙示的な仮説に照らし合わせて証拠を評価しなければならない。このことは、どのくらいのウェイトを測定される手がかりに置くのか、さらに重み付けられた手がかりの値

⁴⁴ 本節は、仮説評価プロセスの諸産物と JDM の質との関連よりむしろ、仮説評価のさまざまな側面と JDM の質との関連を議論する点において、他の諸章とは相違する。これは、仮説評価の産物とは最終的な判断であるためである。

をどのようにして結合するのかの決定を伴う。重み付けと結合の手法は、したがって、JDMの質と関係する。

(1) テスト設計の影響

仮説評価には、テストの設計が要求されるかもしれない。たとえば、監査人は、それぞれの勘定に対する特定のテスト、それぞれのテストにつき標本規模、さらにテストのタイミングを選択しなければならない。デザインの質は通常、JDMの有効性とプラスの関係があるが、効率性とは必ずしもそうした関係があるわけではない (Morris and Rouse 1985)。とくに、知識のあるテスト設計者は、そうでないものたちよりも、レバントな診断テストを数多く選択し、かつ少数の関連しないテストを選択する。これらテストは、その後に重み付けられ、かつ結合されうることになるレバントな情報の手がかりの完全な集合をもたらす可能性のある探索を導くことになる。したがって、重み付けと結合のさいの諸問題は、JDMの質に対するテスト設計の影響を低めるかもしれない。

さらに、知識のある個々人は、高い質のデザインを常に提示するわけではない。たとえば、彼らは、そのテストの選択において確証バイアスの餌食^{えじき}となるかもしれない (Skov and Sherman 1986)。これの主要な兆候は、望ましい仮説を支持する証拠を与える可能性が高いテストに焦点を当てることである (Klayman 1995)。同様に、このことは、不正確な仮説が受容されるよう導き、よって JDMの有効性を低め、あるいは最小限度であれ、不正確な仮説がいくらかの間でも維持されれば、効率性を低めることになる。それぞれの証拠片が検討中の各仮説に対してもつインプリケーションを考察するよう個々人に強制する、標準化されたチェックリストは、当該問題を緩和しうるだろう。

(2) 探索・測定の影響

情報探索と測定は、仮説評価の極めて重要な (vital) 要素でもあり、前述したこれらの活動の諸次元は、当該段階でも JDMの質と関連し続ける。評価プロセスの多面性ゆえに、探索・測定のさらなる変化が生じるかもしれない。このプロセスの1つの側面は、人々は自ら生成する明示的な仮説、上司など他の誰かから与えられる証拠、あるいは統制リスクの評価の一部としてのようにある判断において黙示的な仮説を評価するかもしれないことである。自分たちで仮説を生成する人々は、証拠を裏付ける証拠を探索し、かつそれら仮説を支持するような方法で手がかりを測定する可能性が高い (Klayman 1995)⁴⁵。ある特定の源^{ソース}から仮説を受領する人々はまた、源^{ソース}への信憑性および説明責任に依存して、探索・測定において違ったようにふるまうかもしれない (Petty and Wegener 1998; Lerner and Tetlock 1999)。たとえば、引き継いだ (inherited) 仮説は源^{ソース}が好んでいる仮説と知っている人々は、その仮説を受容するほうへと自らの探索・測定を歪めるかもしれず、

⁴⁵ 個人的関与のそうしたマイナスの影響を緩和する諸要素は、第3章で議論される。

もしも源^{ソース}が信憑性のあるものと認識されるならばとくにそうである⁴⁶。手がかりの測定の諸問題のさらなる議論は、以下に見られる。明らかに、そうした偏った探索・測定は、JDMの有効性と効率性を低めうる。2番目の側面は、以前に述べたように、人々は、仮説間で見分けられる手がかりを探索するよりむしろ、もっとも望ましい仮説とのみ関連する手がかりを探索するかもしれないことである。このことは、その証拠が別の仮説も支持すると認識することができない場合に、不正確な仮説の受容へと導きうる (Fischhoff and Beyth-Marom 1983)。こうした状況では、正しい仮説が見つかるまで探索が続くならば、効率性が低下する。仮説を評価し、懐疑主義を要請する訓練を受ける広範囲に亘る経験を有している場合には、そうした行動は減少する (Asare an Wright 1995)。

(3) 仮説評価の間の重み付けと結合の影響

仮説評価の最終段階は、測定された手がかりの重み付けと結合である。仮説評価の一部のさいのこれら諸段階における規則性を議論する便利な1つの方法は、それらがベイズの定理 (Bayes' Theorem)、すなわち統計的な規範とどのように関わるかにしたがって分類することである (Fischhoff and Beyth-Marom 1983)。人々は典型的に、統計的な仮説評価に困難を抱えることから (たとえば、Peterson and Beach 1967; Fong et al. 1986; Plous 1993)、こうしたフレームワークの利用は、数多くの誤り (エラー) が現れることを意味する。実際に、そうしたエラーのリストといえるものが存在し、これらエラーは、規範的な理論に対して定義される JDM の質の問題へと転換する。しかしながら、それらは、他の方法、たとえば結果に対して定義される JDM の質を必ずしも低めるわけではない。このことは考慮が極度に重要なものであり、なぜならば、第2章で議論されたように、規範的な理論との一致は、会計学研究者が関心をもつ何らかの個人やタスクにとって、相対的には重要でない JDM の質の次元であるかもしれないためである。本節は、知られている範囲で、他の JDM の質の諸次元に関する知見を議論する。

ベイズの定理は、仮説が正しい確率の改訂は、その事前確率、および仮説が正しいとある情報の手がかりが示す程度の乗法的関数であるべきと規定する。それは、以下のように記述される。

$$\frac{P(H|D)}{P(\hat{H}|D)} = \frac{P(D|H)}{P(D|\hat{H})} \times \frac{P(H)}{P(\hat{H})}$$

右端の項は、ある特定の情報の手がかりの受領前に、 H が (\hat{H} 、あるいは H の補集合に対して) 正しい仮説である確率を与える⁴⁷。真ん中の項は、尤度比とよばれ、ある特定の手

⁴⁶ 説明責任の影響は第7章 (未翻訳) で議論され、源^{ソース}の信憑性は第8章 (未翻訳) において議論される。

⁴⁷ ベイズの定理の他の形式は、以下のようである。

$$P(H|D) = \frac{P(D|H) \times P(H)}{P(D)}$$

がかりが観察された場合に (\hat{H} に対して) H が正しい相対オッズ (relative odds) を与える。1 という尤度比は、ある手がかりは H とその補集合とを区分しないと認識されることを意味する。すなわち、診断がつかない (nondiagnostic) とされる。

Fischhoff and Beyth-Marom (1983) が述べるように、人々は、ベイズの定理が暗示する各段階においてエラーを犯す。これらエラーの幾らかは手がかりの測定に関わるけれども、多くは、不正確な手がかりの重み付けと結合をもたらすことになる。最初の段階は、ある所与の仮説の事前確率、およびその補完的な仮説 (あるいは補完的な仮説の集合) を推定することである。上述のように、人々は、これら確率を推定するのにヒューリスティックスを用い、手がかり測定の問題を導くかもしれない。もし彼らが利用可能性ヒューリスティックスを用いるならば、知識のある個々人の推定でさえも不正確であり、なぜなら親近性と顕著性 (サリエンス/突出性) が実際の頻度に加えて想起の容易さに影響するからである。代表性ヒューリスティックスの利用もまたエラーを導き、なぜなら人々は、記憶内のあるパターンと手がかりの類似性に基づき事前確率を判断するからである。場合によっては、類似性は頻度と関連するものの、多くの場合はそうではない。より重要なことに、仮説評価における代表性ヒューリスティックスの標準的な利用は、信念を更新する包括的なメカニズムと同じである。人々がこのようにしてそれを用いる場合、彼らは、状況に特有の情報 (D) が評価中の仮説と類似する程度に自らの判断の基礎を置く。結果として、彼らは典型的に、実験者により計算されて提供された場合でさえ、基準率 (base rates) を過少に重み付けし、あるいは無視する (Kahneman and Tversky 1972)。類似性の判断は、諸項目 (ここでは、 D と H) の共通の特徴と弁別的な特徴との線形結合に基づくとする説がある。しかしながら、これら判断もまた、人々が類似性に関して考えているのか、それとも相違点に関して考えているのか、または D を H と比較するよりむしろ H を D と比較するのかなどかのように、規範的には無関連の諸要因によって影響を受ける (Tversky 1977; Tversky and Gati 1978)。

もう1つの測定の問題は、確率評価をするさいに自信過剰な傾向が人々にあり、確率全てが過大に推定され、よって比率は正しくないかもしれないことである (Lichtenstein et al. 1982)。第3の (重み付けの) 問題は、処理上の制約と自信過剰ゆえに、人々は仮説の完全な集合を特定しないかもしれず、よって事前確率の比率が不完全な確率に基づくことである (Fischhoff et al. 1978; Mehle et al. 1981)。第4の (重み付けの) 問題は、仮説の相乗性 (supra-additivity) を人々が示し、すなわち $P(H)$ と $P(\hat{H})$ の合計が1を超える傾向があることであり、したがって、比率は歪められるかもしれない。恐らくもっとも甚だしいのは、人々は、ある仮説が排除された場合に残りの仮説の確率を調整しないことである。同時に複数の仮説を評価するよりも、一度に仮説を評価する場合に、相乗性は起こりやすい (たとえば、Robinson and Hastie 1985)。

当該局面における諸問題は、さまざまな要因により緩和されうる。以前に述べたように、タスク特殊の知識はヒューリスティックスの悪影響を低減する傾向があり、なぜなら

人々はタスク特殊の戦略を代わりに用いるためであり、あるいはヒューリスティックスは良い知識を巧みに利用する (piggybacking) からである (Gilovich and Griffin 2002)。基準率に関しては、仮説との因果関係を示せば利用を増やすことができる。自信過剰は低減が困難であるけれども (第4章参照)、代替的な複数の仮説を特定するように人々に求めると、それら仮説の集合の完全性が高まる (たとえば、Hoch 1985)。相乗性は、各種の意思決定支援により低減されうる (Hastie and Dawes 2001)。より重要な論点は、事前確率の生成におけるこれらの規則性が、規範的な理論以外の規準に関して定義される JDM の質に影響を及ぼすのかどうかである。ある研究では、監査人がタスク特殊の知識を有する場合には、それらは結果に関して定義される JDM の質に影響しないと知見する (Asare and Wright 1995) が、それ以外には証拠がほとんど存在していない。

次の段階は、尤度比の推定、より一般的には、状況に特殊の情報と所与の仮説との間の関係の評価である。第1に、人々は、条件付き確率を推定するのが困難である。彼らは時として、条件付き確率を逆の条件 (reverse conditional) や結合確率と混同する (Fischhoff and Beyth-Marom 1983; Hogarth 1987)。こうした問題を悪化させるのは、仮説と手がかりの間の因果関係を人々が推定する方法である。因果的推論の理論は、人々は、 H を支持する証拠の強さから代替的な仮説を支持する証拠の強さを差し引き、 H が D を引き起こすかどうかを判断すると示している。証拠の強さは、時間的順序 (H が D の前に起こるか)、 H と D の時点の近接性、および H と D の類似性を含む、さまざまな「因果律 (causality) の手がかり」の存在によって判断される (Einhorn and Hogarth 1986)。これら手がかりが規範的に適切かどうかは、その状況に依存する。人々はまた、もしそうした情報を有するならば、時間とともに H と D が共変動した程度を考察する (Kelly 1973; Kelly and Michela 1980)。これら共分散判断 (covariation judgements) は、 D と非 D 、さらに H と \hat{H} を交差させて作られる分割表のデータに基づきなされるべきである。しかしながら、人々はしばしば、これらデータのすべてを利用しない。多くの場合、彼らは、 D と H の事例を含んだセルのみに焦点を当て、なぜならこれらは、記憶と関連するからである (たとえば、Shaklee and Tucker 1980; Crocker 1981)。さらに、人々は、低い水準の共分散を検出するのに困難がある (Jennings et al. 1982)。さらに、人々はしばしば、 D または非 D として、また H または \hat{H} として諸事例を分類しなければならない。データが曖昧な場合、彼らは、その分類において確証バイアスを示す傾向がある (Crocker)。最後に、因果律の判断は、コンテキスト (文脈) やタスクの言い回し (wording) など、一見すると些細な諸要因によって影響を及ぼされうる。

第2に、人々は、ある仮説と関連する証拠を逐次的にも評価でき、それぞれの手がかりの後で仮説の評価を更新するケース、または1つの集合として、すべての手がかりをみた後で更新するケースがある。第6章においてより完全に議論される研究は、人々は、証拠を逐次的にみるか、あるいは同時にみるかに依存して、証拠を異なって測定しかつ重み付けすると示している。さらに、証拠が逐次的にみられる場合、順番の違いにより異なった評価が形成されることがあり、なぜなら人々は、始めと終わりの手がかりに対してより

大きなウェイトを置くからである (Hogarth and Einhorn 1992)。第 3 に、非診断的な情報が手がかりの集合に含まれる場合、それらがレバントであると考え、ゼロではないウェイトを人々が置くことがある (たとえば、Nisbett et al. 1981) ⁴⁹。第 4 に、人々は、プラス・マイナス両方の証拠を重み付ける方法に関して違いがある (Hogarth and Einhorn)。

第 5 に、代表性ヒューリスティックスが用いられることにより、さらなる問題が起こる (Kahneman and Tversky 1973)。標本の要約統計量から証拠が成り立つ場合、人々は、規模の相違する標本から導かれる証拠を違ったようには評価しないかもしれず、なぜなら仮説とその統計量との類似性のみ焦点を当てるからである。同様に、人々は、極端な値の手がかりに出くわすと、極端な仮説とその手がかりを関連付ける傾向があり、なぜなら平均への回帰を誤って理解するためである。これに加え、証拠の評価はまた、証拠の源^{ソース}の信憑性に左右されることがあり、類似性についてのみ考えている場合に人々はしばしばそれを無視する。ある源^{ソース}を条件とする証拠の適切な評価は、第 8 節で議論される。

上記の問題は、尤度比の分子と分母の双方に関連しうる。分子に関連する追加の諸問題が存在する。第 1 に、尤度比は事前分布 (priors) と規範的には独立であるけれども、仮説について強力な事前分布をもつ人々は、分子を過大に評価するかもしれない ⁵⁰。たとえば、Elstein et al. (1978) は、実際はそうでない場合にある仮説を支持するような証拠の解釈は、経験のある医師の間でもっともよくある仮説評価のエラーであると知見する。第 2 に、分子の測定におけるエラーは増幅されることがあり、なぜなら人々は、分子のみにウェイトを置く傾向があるためである。彼らは評価にとってレバントなものと分母をみなさず、これは部分的には、それぞれの仮説を独立して関連付けるように証拠を評価する傾向があるためである (Doherty et al. 1979; Beyth-Marom and Fischhoff 1983)。

いかなる要因が当該段階の問題を緩和しうるだろうか。条件付き確率を算定する問題は、人々の知識が計算を容易にする方法で構築される場合、または適切な標本空間が別の方法で明確にされる場合には、弱められる (Eddy 1982; Nisbett et al. 1983; Nelson et al. 1995)。共分散判断の問題は、たとえば、人々がタスクに特殊の知識を有する場合、データが表形式で提示される場合、または D と H が測定しやすい場合には、減少する (Crocker 1981)。タスク特殊の知識は、標本の結果の偶然の役割を浮き彫りにし、標本規模の役割の誤解を軽減する (Nisbett et al.: Smith and Kida 1991)。分子にのみ焦点を当てる問題は、考察すべき仮説が 2 つだけ存在する場合に軽減される。これは、タスクや実験インストラクションの関数であるかもしれない (Beyth-Marom and Fischhoff 1983)。他の調整変数 (moderators) は、この先の諸章にて議論される。これら規則性が規範的な基準以外の規準に関して定義される JDM の質に影響するかどうかに関して、共分散判断の問題は、実際

⁴⁹ この研究もまた、第 6 章で議論される。

⁵⁰ 人々はある仮説について強力な事前分布をもつことがあり、たとえば、当該仮説を選好すると知られる誰かに対して彼らが説明責任を有しているためである。

の結果と比較した質に影響しうる (Kunda 1999)。さらに、個人差は不一致を導くかもしれない。このほか、ベイズの定理以外の規準と比較した JDM の質に及ぼす当該段階の問題の影響について、われわれはほとんど知らない。

ベイズの仮説評価の最終段階は、事前のオッズ比と尤度比を掛け合わせることである。この段階は、たとえ人々が両方の比率に注意を払う場合でさえ、JDM の問題を引き起こすことがある。第 1 に、ある特定の仮説の仮説に強くコミットする (すなわち、事前のオッズ比が高い) ならば、最終的な結合プロセスにおいて当該比率が優位を占めることを許容するかもしれない。一つの理由は、単純に、仮説は頻度の高い事象であるためである

(Heiman-Hoffman et al. 1995)。第 2 に、人々は、比率を掛け合わせるよりむしろ、それらを平均することがある (Birnbaum and Mellers 1983)。第 3 に、人々は、異なる多くの方法で当該結合の結果として生じる自らの評価を言い表すように求められるかもしれない。再び、この要因—応答モード—の研究は、第 6 章においてより完全に議論されるが、仮説評価に関連する諸論点を記すことは重要である。たとえば、もし彼らが数値 (10% の見込みがある) に関して、または口頭での確率表現 (見込みは薄い) に関して評価するように求められるとすれば、人々の応答は相違することがありうる (たとえば、Budescu et al. 1988; Wallsten et al. 1993)。加えて、「薄い (remote)」のような確率の表現を人々は相当に異なって解釈し、幅広い応答を時としてもたらすことになる (たとえば、Lichtenstein and Newman 1967; Beyth-Maron 1982)。最後に、数値による確率 (たとえば、直接推定確率 (direct probabilities) やオッズ) を導き出すさまざまな方法があり、これらもまた異なった応答をもたらすことになる (Hogarth 1987)。応答モードを調整する諸要因は、第 6 章で議論される。再び、この段階におけるエラーがいかにして JDM の質の規範的ではない尺度に影響を及ぼしうるかについてほとんど知らない。一例としては、事前分布の過大な重み付けは、不正確さと非効率性を導きうる (Heiman-Hoffman et al. 1995)。明らかに、個人差も同様に、不一致を導くかもしれない⁵¹。

ベイズの定理は仮説を評価するための便利な組織化ツールとして役立つけれども、ほとんどの研究は、人々は、統計的推論を用いて仮説 (あるいはより一般的には、証拠) を評価しないと示している。その代わりに、人々は、因果的推論や説明ベースの推論に基づい

⁵¹ ある決定が仮説評価に基づきなされなければならないとすれば、規範的なプロセスは、期待効用理論により規定される (von Neumann and Morgenstern 1947; Savage 1954)。第 2 章で述べたように、人々は、自らの主観確率 (ベイズの推論に基づき形成) と効用を結合し、もっとも高い期待効用の代替案を選ぶべきである。もちろん、人々はしばしば、こうして定められた行動にしたがわない。たとえば、人々は時として**努力を最小化** (*satisfice*) し、効用につき最低限の閾値を充足する最初の決定の代替案を選択する (Simon 1955)。また、人々はしばしば、決定の代替案がどのように提示されるかに依存して、異なった代替案を選ぶ。

て判断や決定をする (Shafir et al. 1993; Hastie and Dawes 2001)。かような形態の推論では、人々は、数値と計算よりむしろ、口頭でのナラティブに関して考える。Hastie and Dawes は、ナラティブを「因果関係によりくっつけられる暫定的に順序付けられた事象の表現」として定義する。ナラティブはしばしば、「物語」(たとえば、Pennington and Hastie 1986; 1988; 1992; 1993) とか「シナリオ」(たとえば、Jungermann 1985; Schoemaker 1991, 1993) と言及される。Sedor (2002) は、シナリオを「提示される行動が将来の結果に通じる事象の順序を具体的に記述するナラティブ」であると定義する。対照的に、物語は典型的に、過去の事象と関連する。にもかかわらず、さまざまな形態のナラティブは、次のような決まった特徴を共有する。すなわち、暫定的な事象の順序付け、事象間の因果関係、また具体的で、詳細な説明の包含である。

認知プロセスの場合と同様に、仮説・証拠評価の間の因果的推論は、タスクの表記法のようなさまざまな要因により行使されうる。しかしながら、Hastie and Dawes (2001) はまた、かような形の推論が頻繁に起こる 1つの理由は、そうしたナラティブを構築する能力が相対的に強固に接続された現象であると述べる。換言すれば、人々はまた、多様なタスク・環境要因とは関係なく、こうしたやり方での理由を自然に選好する。加えて、人々は、ナラティブの形態を用いて他者とコミュニケーションする傾向があり、なぜならそれは情報を組織立てる便利な方法であるためである (たとば、Baumeister and Newman 1994)。このことは、こうしたコミュニケーションの形態を通じた会計専門家の JDM の操作が可能であることを示唆する。たとえば、物語の形態で投資家と意思伝達する経営者は、そうした経営者とは異なる (さらにより望ましい) 反応を経験するかもしれない。

たとえ因果的推論が引き起こされるとしても、関心のある究極的な問いは、それがどのように JDM の質に影響するのかである。一般に、個々人が仮説の因果の説明を提供する場合、よりも彼らはそれらの仮説に対してそれ以外よりも高い確率を割り当て、またそれらの事象が将来起こることに強い自信をもつ (Kahneman and Tversky 1982)。確率判断に対するかような影響は、判断・意思決定の規範的理論の侵犯の幾らかを説明する (Shafir et al. 1993; Hastie and Dawes 2001)。換言すれば、因果的推論の利用は、当該規準に対して定義される JDM の質を低める。因果的推論の差が JDM の違いをいかに導くかに焦点を当てる別の研究もある。とくに、陪審員の意思決定の文献は、入手する証拠から異なる構築する物語を構築する陪審員では、異なる評決を選択すると示している (たとえば、Pennington and Hastir 1986, 1988, 1992, 1993)。このとき、他者との一致で定義される JDM の質は、因果的推論によって影響される。シナリオに基づく推論の主唱者 (advocates) は、複数のシナリオの利用は、これら因果的推論のマイナスの影響の幾らかを減少しうると示唆する (たとえば、Schoemaker 1993)。しかしながら、実証研究の証拠はこれを支持しない (Kuhn and Snizek 1996)。因果的推論が JDM の質の他の諸側面に及ぼす影響について証拠はほとんどない。

因果的推論は、どのように JDM の質に影響するのだろうか。因果的推論が仮説評価の

間に用いられる場合、調査を特定の仮説に焦点を当てるために用いられる。その仮説への着目は、人々が仮説と関連する記憶証拠から検索し、さらに確証的な証拠を探索し、また仮説を支持するように既存の仮説を解釈するように導く (Koehler 1991)。証拠評価の間に、人々は、その証拠ともっとも適合する物語やシナリオを構築する。人々は複数の物語を構築するけれども、もっとも受容可能なものとみなすものを典型的には保有する。それは、証拠のすべてをもっとも良く説明し、もっともらしいものであり、かつ矛盾を含んでいない (Pennington and Hastie 1992)。物語の構築自体が、このとき、判断や決定を直接的に導くことになる (すなわち、因果的推論の影響は、異なる記憶や情報の探索によるものではなく、むしろ証拠の物語形式への組織化によるものである)。

JDM に対する因果的推論の影響は、少数の要因により調整されうる。第 1 に、完全性に劣る、詳細さに劣る、またはもっともらしさに劣る場合、あるいはそもそも証拠を説明するナラティブを思い描くのがより困難である場合、ナラティブは影響力が弱い

(Hendrick et al. 1989; Koehler 1991; Hastie and Dawes 2001)。加えて、人々に反対を示すような説明 (counterexplanations, 反対の説明) を生成するように求めると、因果的推論の影響を弱めうる (Koehler 1991)。しかしながら、反対の説明は、ほとんどの場合において因果的推論の影響を完全に消し去ることはない。研究は、人々が最初に仮説について推論し、その後反対の説明に関与する場合には、初頭効果 (primacy effect) が存在すると示している。反対の説明は、当初の因果的推論ほど効果的ではないのである。

(4) 証拠評価の間の手がかりの重み付けと結合の影響

証拠評価の間の手がかりの重み付けと結合の影響に関する、数多くの追加的な規則性が存在する。第 1 に、判断や決定をするために人々が証拠 (手がかり) を結合する 2 つの一般的な方法—補償型プロセスと非補償型プロセスの利用—がある。以前に述べたように、人々が補償型プロセス (compensatory processes) を用いる場合、手がかりは互いに「補償し」合うことになる。もっとも頻繁に仮定される補償型プロセスは、レンズモデルにより用いられるもの—荷重加算ルール (a weighted additive rule)—であり、そこで人々はそれぞれの手がかりを認識された重要性によって重み付けし、そのウェイト (重み) を手がかりの値に乘じ、それから重み付けられた値を足し合わせる。補償型プロセスは、「コンフリクトに直面するもの」 (Einhorn and Hogarth 1981) であり、これは、価格と品質のような競合する属性をいかにトレードオフするのかを人々が明確に決定しなければならないことを意味する。

非補償型プロセスは、他方で、手がかりに互いに補償し合わせることはない。これらプロセスの利用の 1 つの動機は、コンフリクトを回避することである。Einhorn (1970) により記述された 3 タイプの非補償型プロセスは、連結型、分離型、および辞書編纂型である。連結型プロセス (conjunctive processes) は、すべての手がかりが最低限度の閾値を超過することを要求する。たとえば、投資信託 (mutual funds) を選別する投資家は、5%を

下回る年率換算のリターンであり、かつ3年の経験のないマネジャーのファンドを決して考慮しないと定めるかもしれない。よって、高リターンであるが新規のマネジャーのファンドは、高い値のリターンという手がかりは経営者の任期の短さという手がかりを埋め合わせないため、考慮されないだろう⁵²。分離型プロセス (*a disjunctive process*) は、ある高い閾値を超える少なくとも1つの手がかりを要求し、他の手がかりに注目しない。芸術に特化した学校は、入試選考にそうしたルールを用いるかもしれない。学生は優れた歌手、ダンサーやアーティストでなければならぬが、その他の特性は関係がない。辞書編纂型プロセス (*a lexicographic process*) では、もっとも重要な手がかりを最初に決定し、その手がかりで最高の値の決定の代替案を選ぶ。もし同点になれば、2番目以降の手がかりに移行することになる。Tversky (1972) により表現された追加のプロセスが、以前に述べた z 属性消去ルール (*elimination-by-aspects rule*) である。最後に、Gigerenzer et al. (1999) は、自らが認識した最初の代替案を人々が選ぶという非常に単純なモデルを提示する。たとえば、それを聞いたことがあるというだけで、ある投資家は Microsoft 社への投資を選ぶかもしれない。

非補償型プロセスの利用へと人々を駆り立てるさまざまな要因が存在する。1つは、コンフリクト回避 (*conflict avoidance*) である。人々はまた、タスクの求めるところが高く、かつタスク特殊の手がかりの重み付けと結合の戦略を有さない場合に、それら (訳注: 非補償型プロセス) を適用する傾向がある (Payne et al. 1993)。タスクの要求の高さには、複雑性と時間面の^{プレッシャー}圧力が含まれよう。以前に述べたように、人々は、補償型ないし非補償型のスキームを用いて処理の認知的な費用・便益を考え、後者は費用がより低いものである。タスクの要求が高まり、認知コストが何らかの閾値を超える可能性が高くなると、人々は、実質的にコストを低めるべく非補償型プロセスを用いる。彼らはまた、たとえば、レバントな手がかりを考慮し損なうがゆえに、JDM の質も低めがちである。非補償型プロセスの利用を調整する諸要因は、金銭的インセンティブのように良い JDM の便益を高めるもの (Arkes 1991) や、タスク特殊の知識のように処理コストを低減するものである。

人々はまた、補償型プロセスを使うさいに、不正確な手がかりのウェイト (重み) と結合ルールを用いることがある。知識のある個々人は、正しい方向でありかつ大きさの手がかりのウェイト (重み) である可能性が高く、なぜなら彼らはこれらウェイト (重み) に関するより多くのフィードバックを受領してきているからである (Einhorn 1974; Johnson et al. 1981; Bonner 1990)。しかしながら、統計的なモデルによるウェイトと比較した場合、彼らの手がかりのウェイトは常に正確であるわけではない。また、他の経験のある個々人が用いるウェイト (重み) と常に一致するわけでもない。知識のある個々人でさえ直面する

⁵² 努力最小化のヒューリスティックス (*satisficing heuristic*) は、結合型プロセスの一例である。

もう1つの問題は、彼らは時として、自らの信念とその選好とを混同することである。すなわち、ある特定の判断の結果が結局は現れることを望む場合、彼らは、その結果がもっとも起こりやすいと見えるような方法で情報を誤って重み付けする。この現象は、「希望的観測 (wishful thinking)」(Hogarth 1987; Babad and Katz 1991; Babad and Yacobs 1993; Babad 1995, 1997) と名付けられ、動機付けられた推論 (motivated reasoning) (Kunda 1990, 1999) の特別のケースであり、反対に金銭的インセンティブが存在し、または大量の知識を人々が有しているとしても生じる。同様に、手がかりを補償的に結合するのに、人々は線形の加法ルールを一般に用いる。彼らは、手がかりと判断や結果との相互作用や非線形の関係を考えない傾向がある (Brehmer and Brehmer 1988; Hammond 1996)。知識のある個人は、それが要求される状況では、より洗練されたテクニックを用いるかもしれない。しかしながら、本質的な不一致を彼らは依然として示すことがある (Brehmer and Brehmer)。

鍵となる問題は、不適切な手がかりの重み付けと結合が質の低い JDM を導く程度である。符号の間違った手がかりを得ると、JDM の質は典型的には下がり、なぜなら人々は良い物事を悪いものとして、悪い物事を良いものとして認知するからである。これ以上に、JDM に及ぼす影響は、タスクの構造に依存する。手がかりのウェイト (重み) の大きさを間違えることは、JDM にとってしばしば問題ではなく、なぜなら多くのタスクは、自然と相關する手がかりを含んでいるからである。(1例として、Bonner et al. [2003] 参照。) 手がかりが相關する場合、人によって異なるウェイトを用いるが、依然としてその JDM に関しては一致し、また結果に対して正確であることもありうる。さらに、これら設定では、手がかりの間で同じ (equal) ないし等しい (even) ランダムなウェイト (重み) は、等しくないウェイト (重み) に基づくのと同一 JDM を導く可能性がある (Dawes 1979)。結果と手がかりとの線形関係を用いること、または手がかりの間の相関はないと仮定することもまた、必ずしも悪いことではなく、なぜなら線形モデルはしばしば非線形モデルと同様に機能するからである。全体として、このとき、不正確な手がかりの重み付けと結合のルールは高い頻度で JDM の質を低めない。

会計にとくに持ち込まれる証拠評価のプロセスは、利益などの将来数値を予測するための時系列の数値の利用である。時系列からの予測は、統計的モデルを用いてなされるけれども、人々がこれら判断を直観的になす理由が数多く存在する。たとえば、彼らは、統計的なモデルを展開する能力をもたないかもしれない。Eggleston (1976) は、直観的な時系列評価のプロセスを3つの段階を有すると特徴付ける。第1に、人々は、系列をもたらしているプロセスを (たとえば、ランダムなものとして) カテゴリー化しようとする。それから彼らは、時系列の平均・分散の推定を含むスキーマを開発するために、そのカテゴリーを利用する。最終的に、これらの推定結果に基づき、人々は系列の将来の諸要素を推定する。

3つのどの段階にも判断のエラーの証拠が存在し、これらのエラーは正確でない時系列の判断を導くことになる。第1に、人々はデータ内のパターンをみることを好み、なぜな

らタスクの構造化は理由付けがより容易にするためである (Simon 1990)。このことは、実際にはランダムである場合に、ランダムではないものとして、人々は時系列を分類するかもしれないことを意味する。他方では、人々は低レベルの自己相関を見破るのに困難を抱え、このことは、実際にはランダムな場合に、時系列をランダムではないと分類するのに失敗するかもしれないことを意味している。さらに人々は、負 (マイナス) の自己相関よりも正 (プラス) の自己相関をより上手に見破ることができ、このことは、負 (マイナス) の自己相関では正確なカテゴリー化がなされ難いことを示唆する (Wagenaar 1972)。さまざまなタイプの生成プロセス、たとえば、自己回帰と移動平均を見破る能力にも差があるかもしれない。平均を推定する場合、人々は、短期で、分散の低い時系列では相対的に正確である。期間の長さとはばらつきが増すにつれて、正確性は下がる (Peterson and Beach 1967)。分散を推定する場合、人々は、高い平均値と関連する分散を過小に見積り、なぜなら彼らは、平均と関連するものとして分散を考えるからである。彼らはまた、分散の計算のさいに平均からの偏差を不正確に重み付ける (Peterson and Beach)。予測をなすためにこれらパラメータから推定する場合、人々は、自らの平均の推定値に依拠し、それを上方ないし下方に調整する。このとき典型的には、彼らは不十分に調整する。これは、アンカリングと調整のヒューリスティクスと類似する (Tversky and Kahneman 1974)。ノイズのような他の諸要因もまた、時系列の判断にマイナスの影響を及ぼしうる。時系列予測における処理のエラーを緩和する鍵となる要因は、タスクに特殊の知識である (Webby and O'Connor 1996)。

仮説・証拠評価 (と他のプロセス) に関連する最後の論点は、人々がそこで考察に携わる程度である。場合によっては、人々は、他者の判断と決定を観察してそれらを模倣することで判断・決定を行う。とくに、彼らは、大勢の人々の行動を模倣する。こうした**群集行動 (herding behavior)** は、多くの会計の設定に関わっている。たとえば、アナリストは、利益のコンセンサス予測を入手でき、投資家は他の投資家たちの決定のコンセンサス (市場価格) を観察できる。人々が群れる多くの理由が存在する。たとえば、第4章で議論されたように、ある者の JDM や知識に自信のなさは、群衆化 (herding) をもたらしうる。とりわけストレスのかかる状況において、群集化は、無意識の感情的な反応の結果であるとも示唆される (Prechter 2001)。他の者の JDM を自分のものとしての適用が質の高い JDM を導くかどうかは、その状況に依存する。たとえば、コンセンサスのアナリスト予測は、利益の予測可能性が高い会社では正確であるかもしれない。

(5) テスト設計の会計研究

仮説・証拠評価に関わる会計研究は豊富であり、したがって本節は、プロセスの局面に基づく研究をグループ化する。最初の研究は、監査における検証のデザインに関するものである。Joyce (1976)、Abdel-Khalik et al. (1983)、さらに Trotman (1985) は、検証のための計画時間に関して監査人間の一致が少ないと知見する。Aly and Duboff (1971)、Biggs

and Mock (1983)、および Kachelmeier and Messier (1990) は、適切なサンプル数の判断に関して、監査人間の一致が少ないと知見する。最近の研究もまた、監査人は、望ましいサンプル数を産出するパラメータを推定するため、それらサンプル数から後ろ向きに作業することもあると知見している。Cohen and Kida (1989) は、監査人のサンプル数の選択における経験と関連する差異を知見するが、いかなる集団がより良質のデザインであるかはわかっていない。Biggs et al. (1988) もまた、経験と関連する差異を見出している。マネジャー（・レベルの監査人、訳者追加＝以下すべて）は、仮説とされる特定のエラー（誤謬）の原因に関連する検証に対してサンプル数を増やす一方で、シニア（・レベルの監査人）は、エラー（誤謬）があるかもしれない勘定に関連するすべての検証に対してサンプル数を増加する。このとき、マネジャー（・レベルの監査人）の JDM が明らかにより効率的ある。

幾つかの研究は、詳細テスト (specific tests) の選択を調査する。Biggs et al. (1987) は、監査法人が指名した熟練者が出した解答と比較して、コンピュータ監査の専門家の質を調査し、これら専門家間の質の水準は相当に高いと知見する。Wright (1988a) は、同様の手続を用いるが、監査人は、在庫勘定に関する幾つかの決定的な検証を実施せず、さらに不適切な検証を含めると知見する。Bonner and Lewis (1990) は、マネジャー（・レベルの監査人）は、シニア（・レベルの監査人）がなすよりも、統制の弱点に関わる理論的に正しい検証をより多く選択すると知見する。Brown and Solomon (1991) は、監査人は検証の代用可能性 (substitutabilities, (他の検証手段と) 代用可能であること) を理解していると知見し、これは効率性という目的にとって重要である。

Brown et al. (1999) は、監査人の検証の選択の2つの鍵となる局面、期待される診断価値 (diagnostic value) およびそれらが所与の仮説を確認する程度を調査する。彼らはまた、初期の仮説と正しい仮説との間の関係の差異に対して、検証の選択を監査人らが適合できる程度も調査する。たとえば、初期の時点の仮説は、正しい仮説のなかに「組み込まれる」かもしれない。言い換えれば、狭すぎるかもしれない。彼らの最初の研究において、「真実の発見」に報償が与えられるインセンティブの下で抽象的な仮説検証タスクをする学生と監査人は、初期の仮説を排除可能な検証を用いるならば、理論的に正しい仮説をより高い確率で見つける。さらに彼らは、検証の選択の適応可能性 (adaptivity) を示し、診断的テストを選択する傾向にある。第2の研究は、監査のシナリオを用い、検証の選択の質における質の証拠は少ないと知見する。監査人らはしばしば、クライアントが示唆した仮説を確認しがちな検証を選択し、これら検証の診断価値を過大に見積もる。最後に、Asare et al. (2000) は、比率の変動の原因を調査するための監査人の検証の選択を調べ、仮説毎の検証数や全体としての検証数ではなく、検証された仮説の数が正しい原因を監査人が決定するか否かに影響すると知見する。

心理学と首尾一貫し、監査の検証デザインの研究は、知識と関連するように思われる、監査人間のデザインの質の相違を知見する。さらに、知識のある監査人でさえ、もつとも

診断的なテストを常を選択するわけではなく、その検証の選択において確証バイアスを示すことがある。不幸にも、われわれは、検証の選択が究極的な JDM の質に及ぼす影響について非常に少ししか知らない。これを調査するのは重要であり、なぜならそうした選択のエラーが監査人の JDM にどのように影響するかは明らかでないからである。すなわち、監査人は用いるべき正しい検証を結局は発見するのでそれらは単純に効率性の問題であるのか、それともそれらは有効性の問題になるのであろうか。検証のデザインが JDM の質に及ぼす影響は、他の諸要因に依存するのだろうか。この分野の研究を継続することに対し、大いなる将来的な見込みが存在する。

(6) 仮説評価中の手がかりの重み付けと結合に関する会計研究

数多くの研究が、仮説評価中の手がかりの重み付けと結合のさまざまな局面を調べている⁵³。推定および事前確率と尤度比の利用に関する研究には、管理会計分野の以下のものが含まれる。Magee and Dickhaut (1978) と Lewis et al. (1983) は、原価差異調査における学生らのヒューリスティックスの使用を調べる。彼らは、学生は「管理図 (control chart)」方略を用い、それは代表性のヒューリスティックスと類似すると知見する。さらに、Lewis et al. は、プロトコル法で評価を測定し、事前確率をほとんど参照しないことを知見する。Brown (1985) は、原価差異のありうる原因の規準率についての情報、およびこうした原因と特定の差異との共変動 (covariance) に関して確証するような証拠やそれらを反証するような証拠、あるいは時間的順序—その原因は、変動のある時期に存在するか否か—を与え、原価差異のありうる原因の学生らの評価を調査する。彼は、確証する (反証する) ような時間的順序の証拠を与えられると、被験者らは、もっとも可能性が高い当初の原因の自らの判断確率を高める (低める)。確証する (反証する) ような共変動の証拠は、これらの確率を変える原因とならない (確率を低める)。さらに、学生は、提供された共変動表の H と D のセルを圧倒的に要求する。Brown (1987) はまた、同様の研究において、原因の偏差の大きさと分散の大きさの類似性 (代表性) を用いて被験者が仮説を評価するかどうかを調べるため、それぞれの原因の標準からの逸脱の大きさについての情報も与える。評価は、類似性と共変動の双方により影響を受ける。

税務においては、Johnson (1993) は、税務専門家は、クライアントの望む税務処理を支持する判例に対し、それを支持しない判例よりも重いウェイトを置くことを知見する。続いて、これら確証的な証拠は、より高い成功確率の評価、さらに税務処理に関するより強い推奨を導くことになる。さらに、成功に関する事前確率の高まりはまた、証拠評価における確証の強まりにつながる。Marchant et al. (1991) は、税務専門家は、学生よりも、新たな税務事例において事実と論点を特定するために実質的に同じ前例からの情報を用いる

⁵³ 仮説評価中の情報探索に関わる会計研究は、以前にまとめられていることを思い起こしなさい。

のが上手いことがあるが、そうではないこともあると知見する。Marchant et al. (1993) は、税務専門家と学生は共に、実質的に同じ事例を特定できると知見する。しかしながら、その事例の予測される結果がクライアントの意に沿わない場合、評価における確証バイアスと首尾一貫し、両グループ共に、事実と論点とを特定するために表面的にのみ類似する事例により重く依存する。実質的に同じケースを用いる能力は、専門家の基準の遵守（コンプライアンス）という観点から質の高い JDM を指し示しうる。しかしながら、さらなる探求で、Davison and Mason (2003) は、税務専門家は、専門家の基準が求めるように、相違する特徴に焦点も当てるよりむしろ類似性を判断する場合に、納税者の状況と前例とに共通する特徴に主として焦点を当てると知見する。Barrick et al. (2004) は、ある仮想的なスタッフ（stuff accountant）のメモをレビューする税務専門家は、正しい税務処理のほうに偏っているメモよりも、クライアントが望む立場に対して（誤って）偏っているメモをより説得力があるとみると報告する。しかしながら、彼らはまた、正しい税務処理のほうに偏っていないメモは、正しい処理のほうに偏っているものよりも説得力があるとみられることも知見する。最後に、Kahle and White (2004) は、税務専門家は、自らのクライアントが望む立場を証拠が支持する場合、支持しないが自分自身の当初の信念に対して確証バイアスを示さない場合よりも、適切な税務処理に関する自身の当初の信念を改訂することを知見する。

財務会計においては、倒産を予測する学生が代表性ヒューリスティックスを用いるか否かを、Johnson (1983) が調査する。彼は、諸比率が倒産の有無の代表的なものと信じるるとき、学生らは基準率（base rates）を無視し、比率が代表的なものでないとみなされるときには基準率を過小に重み付けすると知見する。数多くの研究が、倒産を予測する融資担当者による基準率の使用を調査する（Casey 1983; Houghton 1984; Casey and Selling 1986; van Breda and Ferris 1992）。これらの研究は、Libby (1975)、Zimmer (1980) および Casey (1980a) による正確性に対する基準率の影響に関する見解の食い違う初期の研究をフォローし、食い違いの原因は、Libby と Zimmer は母集団の基準率を開示した一方で、Casey の研究はそれを開示しなかったことであると示唆する。よって Casey の研究の被験者らは、自ら認識した基準率を用いがちである。このことは重要であり、なぜならこれら研究は、真の母集団比率よりもずっと高い、半数の企業が倒産企業であるサンプルを用いるためである。驚くことではないが、これらフォローアップ研究は、開示自体に依存し、基準率の利用に関する相反する知見を得ている。全体として、予測の正確性はこれら研究では相当に高いが、サンプルの基準率が真の母集団の基準率、よって被験者の事前確率と近似する場合ほど正確性は高いようである⁵⁴。最後に、Hammersley et al. (1997) は、ある勘定の変

⁵⁴ 少数の研究（たとえば、Ganguly et al. 1994）は、抽象的なタスクを伴う実験市場における代表性ヒューリスティックスの利用を調査する。これら研究は一般に、大きな金銭的インセンティブがある場合でさえも基準率の過小な重み付けを知見する。

動 (fluctuation) の原因の仮説を説明する学生は、それを説明しない学生よりも高いその原因の確率を見積もると知見する。

診断的なプロセスである監査と変わらず、監査タスクを伴う仮説評価の研究はたくさんある。事前確率の推定と利用の研究には、Swieringa et al. (1976) があり、抽象的なケースや監査のケースにおいて学生は代表性ヒューリスティックスを常には用いないようであり、彼らは常に基準率を無視するわけではないと知見する。Joyce and Biddle (1981b) と Holt (1987) は、監査人は、あるコンテキストでは基準率を用いるが、それらを幾らか過小に重み付けすると示している。Kida (1984a) は、倒産を予測する監査人は一般的に、基準率を過小に重み付けするが、倒産の結果と基準率を因果的に関連付ける場合には、過小な重み付けの程度が低いと知見する。Kaplan et al. (1992) は、経験のある監査人は、経験のない監査人よりも、比率変動に関連する仮説を基準率の観点から順位付けしがちであると報告する。Asare and Wright (1995, 1997a, 1997b) は、比率の変動に対して自ら生成した仮説の集合や与えられた仮説の集合を評価する監査人は、その事前確率は相対的な基準率を反映するけれども、相乗性 (supra-additivity) を示すと知見する。Tuttle (1996) は、監査人は、その基準率が示唆する順序で比率変動の仮説とされる原因を格付けすると示している。Mock et al. (1997) は、彼らの研究における半数の監査人は、事前確率に関心を払い、残る半数は状況に特殊な証拠にのみ依存すると知見する。最後に、Heiman (1990) は、比率変動に対してより多くの代替的な仮説を生成する監査人ほど、当初の仮説の確率を割り引きがちであると示しており、これは多くの監査人は不完全な仮説の集合を生成するのを示唆している。

次の幾つかの研究は、監査人による尤度比の推定および利用を調べる。第1に、Nelson et al. (1995) と Bonner et al. (1996) は、自身の知識構造と比較的に齟齬がある条件付き確率を判定しなければならない監査人は、より首尾一貫的になるようにそれらの条件 (文) (conditionals) を反転させる傾向があると知見する。第2に、Waller and Felix (1987) は、監査人の共変動の判断は、(1つだけのセルの利用のような) 正しくないルールよりも、絶対的な水準はしばしば過大にあるいは過小に見積られるけれども、共変動の判断のための正しいルールと相関すると報告する。プラスの証拠に対してマイナスの証拠を受領すると、監査人はその確率判断をより大きく修正するが、プラス・マイナスの証拠双方に対する反応には大きな差があることを知見する研究も存在する (Kida 1984b; Ashton and Ashton 1990; Anderson and Maletta 1994) ⁵⁵。

次に、幾つかの研究は、プロセスのこの段階での監査人による代表性ヒューリスティッ

⁵⁵ しかしながら、Pei et al. (1992b) を参照すべきであり、彼らは反対の結果を知見する。彼らは、自分たちのタスクが財務監査よりむしろ業務監査 (performance audit) であるがゆえに、こうしたことが生じると推論する。業務監査の設定では、プラスの証拠は異常である (atypical, 余りない) もの、財務監査ではそうではない。

クスの利用を調査する。Swieringa et al. (1976) は、学生は、サンプルの大きさの重要性を常に正しく評価しそこなうわけではないと知見する。Uecker and Kinney (1977) は、サンプリングを用いて統制の検証の結果を評価するさい、監査員はこうしたヒューリスティックスを一貫して用いるわけではないと報告する。にもかかわらず、監査人の大部分は、理論的なエラー（錯誤）を犯し、なぜなら、彼らはサンプルの大きさに注意するけれども、それを過小に重み付けるためである。Nelson (1995) は、監査人は、サンプルの結果を評価するさいにサンプルの大きさを考慮するが、それを過小に重み付けすると知見する。最後に、2つの研究が、代表性ヒューリスティックスの利用のもう1つの影響、すなわち**結合の誤謬** (*conjunction fallacy*, 連言錯誤) を調査する。ここで人々は、複数の事象の結合（訳注. 複数の事象が同時に起こること）の確率を、別個の事象の1つないしは両方の確率よりも高いと判断し、これは確率理論と矛盾することになる。Frederick and Libby (1986) と Ho and May (1993) は、監査人と学生は、監査判断においてかような誤謬を示すと知見する。

仮説評価の間の確証バイアスを調査する研究もある。Butt and Campbell (1989) は、内部統制システムについての事前信念を確証する教示を与えられる監査人は、事前信念を確証しない教示を与えられる、あるいは教示のない監査人よりも、(同じ証拠の集合のもとで) 高い確率判断をすると知見する。Church (1991) は、確証的な証拠と確証しない証拠をみる監査人は、自らが選ぶエラーとは無関係に、自身が当初に仮説付けた統制の弱点と首尾一貫するように証拠を解釈すると知見する。しかしながら、McMillan and White (1993) は、比率変動の原因を評価するさい、監査人は確証的な証拠よりも確証しない証拠により注意することを知見する。次に、数多くの研究は、比率変動の原因を評価する監査人は、仮説を単独で評価すると知見する。換言すれば、監査人は、尤度比の分子にのみ焦点を当てる (Asare and Wright 1995, 1997a, 1997b)。最後に、Heiman-Hoffman et al.

(1995) は、比率変動の仮説付けた原因として高い頻度のエラー（誤謬）を引き起こす監査人は、確証しない証拠に直面すると、評価の間に当該仮説から距離を置くことが困難であると知見する。

残る研究は、さまざまな論点を調査する。Anderson and Wright (1988) は、統制の弱点に起因する仮説とされるエラーの監査人と学生による評価を調べる。ある特定の仮説とされるエラー（誤謬）に対する説明を与えるよう求められた学生（監査人）は、より高い確率判断を与える（与えない）。Koonce (1992) は、比率変動の仮説とされる原因に関連する説明（反証）を与えるよう求められた監査人は、統制条件の被験者がなすのと比べて、より高い（より低い）確率を見積もると知見する。Koonce and Phillips (1996) は、比率変動に対するクライアントが提示するエラー（誤謬）のない原因は、それらが理解しやすい場合、より起こりがちである (*probable*) と評価されると知見する。

仮説評価の手がかりの重み付けと結合の段階に関わる研究は、会計・経営の学生は、心理学研究で知見される多くの規則性（たとえば、代表性の利用と、結果的に起こる基準率

とサンプルの大きさの情報の無視や過小な重み付け、さらに共変動の判断時の全情報を利用しないこと)を表わす傾向があると指示している。しかしながら、会計専門家はこれら多くを表わす可能性が低く、より効率的に職務するために適応的なメカニズムを可能にするさいに決定的である知識と首尾一貫する。たとえば、監査人は、一般集団よりも、基準率とサンプルの大きさの情報に敏感である。さらに、彼らは、評価の局面で確証バイアスを示す可能性が低い。とは言っても、監査人は、その統計的なトレーニングと豊富な経験ゆえにバイズの仮説評価にとって適切な知識を入手する可能性が最も高いものの、依然として体系的なエラー(誤り)を犯す。たとえば、彼らは、基準率とサンプルの大きさの情報を過小に重み付けし、不完全な仮説の集合を特定し、かつ仮説を不十分に評価する傾向がある。これら研究の多くは、監査人は、その確率判断において保守的であるとも知見する。すなわち、彼らは、倒産のようなネガティブな事象に対して高すぎる判断のあまり失敗する傾向がある。

これらの知見から生起する鍵となる疑問は、Asare and Wright (1995)により提示されるものである。もし監査人(や他の会計専門家)がバイズの方法で仮説を評価せず、よって規範的な理論と比べてJDMの質が定義される場合にその質の問題を示すならば、そうした行動がJDMの質の他の諸次元(たとえば、結果と比較した正確性)に対して及ぼす影響とは何だろうか。もし悪影響がほとんど存在しないならば、これらエラー(誤り)は、問題とはならないかもしれない。換言すれば、監査人(ら)は、その限定合理性に対処するべく適用してきたかもしれず、よって彼らにとってもっとも重大なJDMの質の諸次元で彼らを助力する。他方で、エラー(誤り)は、適応の必要経費(necessary costs)という深刻な帰結をもたらすかもしれない(Arkes 1991)。さらなる研究が当該論点を調査すべきである。

(7) 証拠評価中の手がかりの重み付けと結合に関する会計研究

証拠評価の研究に目を向けると、幾つかの研究は、株価予測や投資選択を調査する。Slovic (1969)とSlovic et al. (1972)は、価格判定、手がかりの重み付け、および全体処理(configural processing)に関し、株式ブローカーと学生との間での重大な不一致を知見し、大きな不一致を示すブローカーもいたとする。Wright (1977a, 1979)は、中程度のインデックスの適合(moderate matching indexes^{訳注})と反応の直線性、さらに非線形的な処理もあったことに加え、相対的に低い正確性および学生の間の中程度の不一致を知見する。Anderson (1988)は、アナリストは投資家とは異なる手がかりの重み(ウェイト)を用い、異なった投資決定をすると知見する。Olsen (1997)は、資産運用管理者(マネー・マ

訳注 原著(Wright 1977a, 678)には、「達成インデックス(the achievement index)」というパフォーマンス指標が記載、説明されている。なお、Wright (1979)は、掲載誌の名称変更などもあり入手できなかった。

ネジャー)は、幾つかの経済事象の確率を評価するさいに希望的観測 (wishful thinking) を示すと知見する。

次に、Lipe (1998) は、学生の投資家は、リスクを判断し、投資を評価するさいに共変動情報を用いるのが困難であると知見する。特に、彼らの誤解は、内的に不整合な投資選択を導く。Amir and Ganzach (1998) は、利益予測をするさい、アナリストは代表性およびアンカリングと調整のヒューリスティックスの双方をどのように用いるのかを調査する。彼らは、アナリストは、利用可能な目立つアンカーがある場合、アンカリングを用いるようであると知見する。アナリストがその予測の下方への修正をする場合には、以前の予測は、以前の利益よりも目立ち、かつ特に突出したものである。アンカリングは、不十分な調整により、予測が不正確に修正されるよう導く。代表性がより一般に影響する他の環境では、不正確性は、予測の極端さによる。Sedor (2002) は、因果的 (あるいはシナリオに基づく) 推論がアナリストとの利益予測に及ぼす影響を調査する。因果的推論に関わるならば、そうでない場合よりも、アナリストは楽観的な予測をする。当該影響は、利益のある企業よりも損失の出ている企業にとって大きい。

数多くの研究は、時系列の予測も調査する⁵⁶。Eggleton (1976) は、さまざまな時系列の条件下での学生らの製造原価の予測を調べる。被験者は、ランダムかつ負の自己相関のある系列に対して類似した推定を行い、これは、彼らが後者の (負の自己相関の) パターンを看破しないことを示唆する。しかしながら、彼らは、正の自己相関のある系列に対してはより高い推定を行う。加えて、ランダムまたは負の自己相関が認識される系列に対する被験者の予測は、その推定される平均と近似する。翻って、これら推定は、統計モデルによる予測と比べて、ランダムな系列では相対的に正確であり、負の自己相関の系列では過大である。正の自己相関のある系列に対する予測は、その推定される平均に十分とはいえない調整を加えたものであり、統計モデルによるものより低いことを示している。このほか、平均においては差がないにもかかわらず、高い分散の系列に対する予測は低分散の予測よりも高い。Eggleton (1982) は同様の結果を報告する。

Andreassen (1987) は、株価を予測する学生は、系列の因果関係を説明するメディアのストーリーを読む場合、その予測において非回帰的 (nonregressive) である傾向にあり、代表性ヒューリスティックスと首尾一貫する。換言すると、彼らは、系列の平均からかけ離れる。結果として、彼らの取引利益は低いものである。Andreassen and Kraus (1990) は、複数の同一のトレンドの事例を学生がみると、予測がより回帰的ではなくなると知見する。この場合、しかしながら、回帰的でない予測者ほどより正確ではある。Maines and Hand (1996) は、学生の四半期利益の予測は、系列の移動平均と自己相関の構成要素を反映はするが、過小に重み付けすると報告する。彼女たち、これらのエラー (錯誤) は、プ

⁵⁶ これら研究の少数は、財務会計数値よりもむしろ生産コストの予測を調査するが、これらの研究を一緒に議論するのがもっとも都合が良い。

ロセスの誤解と推定される平均からの不十分な調整の両方によるものであると示唆する。

Calegari and Fargher (1997) もまた、学生は、実験のマーケティングの設定において時系列の構成要素を過小に重み付けると知見し、これはアンカリングと不十分な調整と首尾一貫するものである。Bloomfield et al. (2003) は、実験市場を用いるが、相対的に信頼できない情報に人々が過大なウェイトを置くという異なる理論的フレームワークに依拠する。利益の時系列のコンテキストでは、これは過去の情報であろう。彼らは、そうした（訳注．過去の情報に対する）過大な重み付けが、現在の利益が過去の利益の水準と同様であるか否かに依存して、時系列の構成要素の過小ないし過大な重み付けをもたらさうと予測しかつ知見する。最後に、数多くのアーカイバル研究が、アナリストの利益予測は、統計的な時系列のモデルの予測よりも正確であると報告する (Schipper 1991)。しかしながら、これらの研究もまた、アナリストと投資家は、時系列の構成要素の誤った重み付けと首尾一貫する時系列予測のエラー（誤り）を犯すと知見する（たとえば、Bernard and Thomas 1990; Mendenhall 1991; Abarbanell and Bernard 1992; Ball and Bartov 1996; Brown and Han 2000）。

次に、幾つかの研究は、倒産予測やその他の信用関連の判断を調査する。Abdel-Khalik and El-Sheshai (1980) は、手がかりの重み付けは、債務不履行の判断をする貸付担当者間での少額の不正確さを説明すると知見する。同様に、Chalos and Pickard (1985) と Lewis et al. (1988) は、債務不履行の判断と債券格付けの結果の正確さに対して、手がかりの重み付けと反応の線形性 (response linearity) はほとんど影響がないと知見する。Schepanski (1983) は、信用力 (credit worthiness) の判定をする学生の間で全体処理の証拠がほとんどないと知見する。Schneider and Selling (1996) は、タスク複雑性が低い場合にのみ、非線形モデルが線形モデルよりも学生の倒産予測と適合すると知見する。Biggs et al.

(1985) は、どの会社に対して貸付が認められるべきかに関する選択を行う貸付担当者によるタスク複雑性に対する反応において、非補償的プロセスの利用を知見する。最後に、Paquette and Kida (1988) は、ある集合内から最高の格付けの会社を選ぶ会計士の選択を調査する。被験者らは、補償的または非補償的な戦略を用いるよう訓練された。非補償的な戦略を用いる被験者は、より効率的であったが、実際の格付けに比べてなお正確である。

監査人の証拠評価の研究には、統制リスクの評価に関連するものが多くある。Ashton (1974a, 1974b) は、評価と手がかりの重み付けに関して監査人の中のそれなりに高い一致を知見する。なお、全体処理の証拠はほとんど存在しないとされる。Ashton and Kramer (1980) と Ashton and Brown (1980) は、学生と監査人それぞれで同様の結果を知見する。Hamilton and Wright (1982) は、同様の結果を、さらに経験のある監査人はそうでない監査人より多く的一致を示すものではないと知見する。Bonner (1990) は、しかしながら、マネジャー（・レベルの監査人，訳者補）は、シニア（・レベルの監査人，訳者補）よりも高い一致を示し、これは主として手がかりの重み付けの高い一致によるものであると知見する。Brown and Solomon (1990) は、統制手続は統制リスクに対してインタラクテ

イブな影響を及ぼすため、全体処理が行われるべき事例を設計し、以前の研究よりも多くのそうした処理を知見する。

同様に、幾つかの研究では、他のリスクと信用 (reliance) の判断の間の証拠評価を調査する。Brown (1983) と Schneider (1984) は、内部監査人に対する信用を評価する監査人を用いて Ashton (1974a, 1974b) と同様の結果を知見する。Maletta (1993) と Maletta and Kida (1993) は、特定の条件下について、こうした判断の全体処理を知見する。Colbert (1988) は、固有リスクの設定において Ashton と同様の結果と知見する。Bonner (1990) は、マネジャー (・レベルの監査人, 訳者補) は、シニア (・レベルの監査人, 訳者補) よりも分析的手続のリスクについて高い一致を示し、これは手がかりの重み付けの高い一致によるものであると知見する。Brown and Solomon (1991) は、発見リスクの判断で、自身らの以前の研究と類似する結果を知見する。

これらの研究のほか、Moriarty and Barron (1976) は、監査人の重要性の判断は、大概は線形加算的であると知見する。Raghunandan et al. (1991) は、偶発損失の開示と監査報告に関連する監査人の情報処理が本質的に補償的であると知見する。これは、監査基準と整合的であるが、財務会計の基準とは合致しない。Simnett and Trotman (1989) は、不適切な手がかりの重み付けは監査人の倒産予測のエラー (誤り) の原因となるが、それは (自分たちの手がかりを選択するよりむしろ) 実験者によって提供される手がかりを用いる場合のみであると知見する。Rosman et al. (1999) は、継続企業の判断における実質的な全体処理を知見する。

2つの研究は、会計処理の決定における監査人の前例の証拠 (precedent evidence) の利用を調査する。Salterio (1996) は、前例の類似性は会計処理についての監査人の判断に影響を及ぼすが、クライアントの選好は影響しないと報告する。しかしながら、彼のアーカイバル研究は、監査法人の研究部門はクライアントの選好と合致する前例のみを選択する傾向があると示している。追跡調査において、Salterio and Koonce (1997) は、類似性が前例の証拠への依存に影響すると報告する。さらに、複数の前例が一貫している場合、監査人の判断は前例により示唆される処理を反映する。しかし、前例が種々雑多である場合には、監査人はクライアントの立場を支持するようにそれらを解釈する。

最後に、ファイナンス文献はハーディング (herding, 同調) に関連する議論と分析的モデルに満ち溢れている (たとえば、Scharfstein and Stein 1990; Froot et al. 1992 ; Trueman 1994; Prechter 2001) けれども、当該行動が JDM の質に及ぼす影響についての証拠はほとんどない。既存の証拠はたいてい、ハーディングの存在、あるいは株式リターンなどの経済的帰結に関わるものである。Shiller and Pound (1989) は、質問票調査 (サーベイ) に基づき、機関投資家は変動性 (ボラティリティ) の大きい株式に対するハーディング行動を示していると報告する。Grinblatt et al. (1995) は、投資信託のマネジャーの間のハーディングを知見するが、当該ハーディングはリターンには何ら影響がない。同様に、Wermers (1999) は、投資信託のマネジャーの間の小型株におけるハーディングを報告する。しか

しながら、ハーディングはこれら株式のリターンに対してプラスの影響を及ぼしている。Nofsinger and Sias (1999) は、ハーディングと一貫する行動を機関投資家の間で立証し、ハーディングはリターンとプラスに関係する。Graham (1999) は、投資ニュースレター間のハーディングを知見する。対照的に、Lakonishok et al. (1992) は、投資家によるハーディングの証拠はほとんどないと知見する。ただ1つの実験研究では、Cote and Sanders (1997) は、投資家間でのハーディングを知見する。最後に、Hong et al. (2000) は、経験の少ないアナリストは、経験豊富なアナリストに比べてハーディングを示しがちであると報告し、Clement and Tse (2005) は、アナリスト間のハーディングは以前の正確性、仲介手数料 (brokerage) の大きさと経験とプラスに関連し、フォローされる産業の数とマイナスに関連すると知見する。さらに、「ハーディング予測」は、「大胆予測 (bold forecast)」よりも正確性が低い。

証拠評価の間の手がかりの重み付けと結合についての会計学の研究は、心理学研究と類似する知見を報告する。株価予測のような難しいタスクでは、手がかりの重み付けについての大きな不一致が存在する。内部統制の評価に関わるいくつかの実験タスクのようなより単純なタスクでは、より多くの一致が存在する。さらに、(モデルと比べた) 手がかりの重み付けの正確さや一致は、質の高い JDM と関連する。しかしながら、手がかりの重み付けの不正確さや不一致は、質の低い JDM と必ずしも関連しない。後者の結果は、手がかりの間の冗長性ゆえに起こりがちである。会計専門家は、実験の諸タスクが非線形処理や全体処理を示すのを許容するよう構築されない限りにおいて、線形の加法処理を用いる傾向がある。しかしながら、線形加法処理以外のものを立証する研究では、JDM に対するこの影響を調査しない傾向がある。よって、そうした処理の重要性は依然として不透明である。時系列予測の研究は、学生は、心理学で立証されるのと同様の間違い (エラー) を犯すと知見する。統計的なモデルを凌ぐことができるけれども、専門家も同様に間違い (エラー) を犯す傾向がある。最後に、投資家およびマネージャーのような会計専門家間のハーディングを立証する研究も存在するが、そうした行動が個々人の JDM の質と関連する帰結にどのようにして影響するのかは明らかではない。

(8) 要約

本章は、JDM の質に影響する認知処理の規則性を調査することにより、ヒト変数の議論を終える。これらのプロセスの規則性と関連するエラーの多くは、人々が直面する処理の制約と彼らがこれらの制約を巧みに回避するため展開してきた適応メカニズムの組み合わせにより起こる。すなわち、適応メカニズムは、大部分は助けになるが、完全ではなく。つまりそれらは、制約を完全には回避することができず、それらの利用もまた不可避のコストを伴う (Arkes 1991)。

とくに、本章は、記憶検索、情報探査、問題表象、仮説生成、および仮説と証拠の評価の諸側面の影響を議論する。会計研究の知見の多くは、一般の人々の心理学研究からのもの

のと一致している。最大の違いは、監査人の処理の研究で知見される。監査人は、情報探査と仮説評価の間には、確証バイアスにあまり影響されないかもしれない。さらに、専門家としての懐疑心を発揮すべきという彼らの要求事項は（関連する訴訟の支払いの可能性とともに）、監査人がより保守的な表象を選択し、否定的な情報に対してより焦点を当て、かつ保守的に控え目な確率判断をするようにするかもしれない。監査人はまた、ヒューリスティックスを用いる可能性が低いと、あるいはヒューリスティックスが付加するものの知識が優れているために、基準率の無視とサンプルの大きさの情報に対する悲感性（insensitivity）のような代表性のヒューリスティックスの悪影響を受けづらい。最後に、監査人は、適切な環境下では他の意思決定者よりも、構成的に（configurally）処理するかもしれない。

会計学における認知処理の将来研究は、管理会計専門家と投資家のように、そのプロセスが未開拓である個人に対して、プロセスの規則性を立証し続けるべきである。より重要なことは、Asare and Wright（1995）のような路線に沿い、JDMの質のさまざまな側面に対するプロセスの影響を調べるべく、研究が拡張されるべきである。これは、会計専門家のプロセスがその環境に適切に適応する程度を理解にとってはもちろん、一般の人々と同様に、そうした適応が会計専門家に対して重大なコストをもたらすか否かの理解にとっても決定的である。最後に、研究作業は、とくに重要であり、かつ恐らくは会計のコンテキストに特有のプロセスの論点を探求し続けなければならない。たとえば、仮説を生成するためのグローバル・モデル（global models）の利用は、質の高いJDMを典型的には導かないが、依然としてこれは、財務分析のような領域においては望ましい技法であるかもしれない。いかなる要因が当該技法の適用に影響を及ぼしたのか、さらに仮説生成の間に起こりうるそのマイナスの影響を相殺する別のプラスの影響があるかどうか、研究は探求するだろう。

Ver. 2023/10/13（原著 156 頁/ 訳書 244 頁まで）